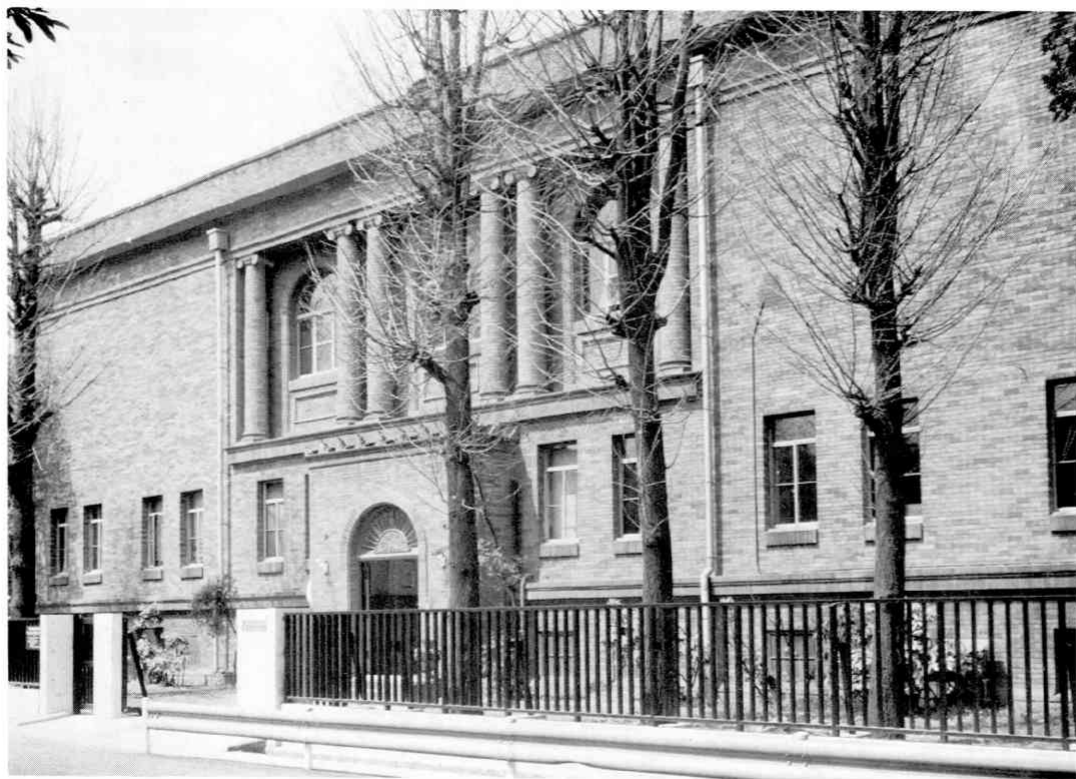


東京国立文化財研究所要覽

1972

昭和47年度



美術部庁舎



庶務課・保存科学部庁舎



芸能部・保存科学部庁舎

東京国立文化財研究所建物所在図



1. 美術部庁舎
2. 庶務課・保存科学部庁舎
3. 芸能部・保存科学部庁舎

目 次

I	沿 革	1
1	設立の経緯	1
2	年 表	1
3	歴代所長	5
II	設立目的と機構	6
1	機 構	6
2	職種別予算定員	7
III	土地・建物	8
1	建物の面積・構造一覧	8
2	建物の平面図	9
IV	予 算	13
1	歳出予算	13
2	科学研究費補助金交付決定額	13
V	研究活動及び事業	14
1	研 究 活 動	14
(1)	美 術 部	14
A	研究・調査活動の概要	15
B	研究題目	15
C	研究・調査活動	21
D	主要研究業績	27
E	科学研究費題目	32

(2) 芸 能 部	32
A 研究・調査活動の概要	32
B 研究 題 目	33
C 研究・調査活動	36
D 主要研究業績	38
E 科学研究費題目	41
(3) 保存科学部	41
A 研究・調査活動の概要	42
B 研究 題 目	43
C 研究・調査活動	48
D 主要研究業績	53
E 科学研究費題目	56
F 受託研究	56
2 事 業	57
(1) 出 版	57
A 美術研究	57
B 日本美術年鑑	59
C 扇面法華経	59
D 芸能の科学	59
E 保存科学	60
F その他の出版物	60
(2) 公開学術講座	63
(3) 開所記念日行事	64
(4) 国際国内関係	68
VI 研究施設・設備	70
1 蔵 書	70
2 資 料	70
3 機 器 ・ 設 備	71

4	黒田記念室	75
5	閲覧室	76
VII	職員	77
1	現職員	77
2	旧職員	79
VIII	関係法規	81

I 沿 革

1 設立の経緯

本研究所は、昭和27年4月1日発足したのであるが、その前身であり母胎となったものは、昭和5年に創設された帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、大正13年7月、故帝国美術院長子爵黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために出損した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行なうべき事業の選定を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原鏝二郎および東京美術学校長正木直彦とはかつて諸方面の意見を徴し、またわが国美術上の必要に照らして次の事業を行なうこととした。

- (1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
- (2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
- (4) 事業成立のうへは一切これを政府に寄附すること。

2 年 表

昭和元年12月 前記の事業を遂行するため委員会が設置され、東京美術学校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業について東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列について東京美術学校教授久米桂一郎・岡岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二および大給近清、建築造営について東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務について遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。

昭和2年2月 美術研究所準備事業を開始した。

同年10月 東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192㎡の建物1棟を起工した。

同3年9月 前記の建物が竣工したので、美術研究所開設のため必要な備品・図書・

写真等の研究資料を設備し、また館内に黒田子爵記念室を設け、同子爵の作品を陳列した。

同4年5月 遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。

同5年6月28日 勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。

同年10月17日 美術研究所開所式を挙行了した。

同7年1月 美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物「美術研究」を創刊した。

同年4月18日 株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う5ヶ年間毎年5千円、合計2万5千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。

同年5月26日 帝国美術院はこの申出を受理した。

明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行なうことになった。

同9年10月18日 毎年10月18日を開所記念日と定めた。

同10年1月28日 鉄筋コンクリート造、2階建、延面積129㎡の書庫が竣工した。

同年4月「日本美術年鑑」の編纂事務を開始した。

同年6月1日 勅令第148号により美術研究所官制が公布された。

研究資料閲覧規程を制定し、閲覧事務を開始した。

同12年6月24日 勅令第281号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。

同年11月29日 美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。

同13年2月12日 木造、平家建、延面積97㎡の写真室1棟が竣工した。

同19年8月10日 黒田清輝の作品、ならびに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。

同20年5月28日 美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町1丁目本間家倉庫3棟に疎開した。

同年7月～8月 酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市外牧曾根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之

丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。

同21年3月29日 酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。

同年4月4日 酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し引揚げを完了した。

同年4月16日 東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開中であった黒田清輝作品ならびに写真原版の引揚げを完了した。

同22年5月3日 美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。

同24年 本年度から科学研究費により光学的方法による美術品の鑑識に関する研究が開始された。

同25年8月29日 文化財保護法の制定に伴い、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。

同26年1月31日 美術研究所組織規程（昭和26年文化財保護委員会規則第5号）が定められ第一研究部・第二研究部・資料部、庶務室が置かれた。（昭和25年8月29日から適用）

同27年4月1日 東京文化財研究所組織規程（昭和27年文化財保護委員会規則第4号）が定められ、美術部・芸術部・保存科学部・庶務室の3部1室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。

同年7月1日 芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室2室を同大学から借用し、研究を開始した。

同28年4月26日 保存科学部研究室は、国立博物館保存修理課保存技術研究室として昭和22年発足以来、東京国立博物館地階の1室に置かれていたが、同館構内の倉庫132㎡を改造のうえ移転した。

同29年7月1日 東京文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和29年文化財保護委員会規則第1号）、東京国立文化財研究所となった。

同32年3月28日 東京国立博物館構内に木造、外部鉄網モルタル塗、平家建、8㎡の保存科学部の薬品庫が竣工した。

同年11月30日 従来の2階建書庫のうえに更に1階を増築3階建とし、増築分延面積71㎡が竣工した。

同34年4月30日 国立文化財研究所研究受託規程（文化財保護委員会告示第14号）が

定められ、この年度から受託研究が開始された。

同36年9月16日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和36年文化財保護委員会規則第1号）、従来の庶務室は庶務課となった。

同37年3月31日 東京国立博物館構内に保存科学部庁舎として、鉄筋コンクリート造2階建延面積663㎡の建物1棟が竣工した。

同年7月1日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和37年文化財保護委員会規則第1号）、新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。

同年7月20日 芸能部研究室は、保存科学部庁舎の竣工に伴ない、旧保存科学部庁舎に移転した。

同43年6月15日 文部省設置法の一部が改正され（昭和43年法律第99号）、本研究所は文化庁附属機関となった。

同44年8月23日 保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎（延1950.41㎡）の起工式が行なわれた。

同45年3月25日 前記の別館が竣工したので、同年5月26日竣工式が行なわれた。

同45年4月22日 芸能部は、別館3階に移転した。

同45年5月8日 保存科学部は、別館の地階～2階に実験用機械類の移転据付を終った。

同45年6月29日 保存科学部庁舎の1階の模様替工事に着手し、同年10月15日工事が終了した。

同年11月2日 所長および庶務課は、本館から保存科学部庁舎の1階に移転した。

（本館は、美術部庁舎となる。）したがって研究所の所在地表示は「12番53号」を「13番27号」と変更された。

同46年4月1日 保存科学部庁舎および別館の敷地2,658㎡を東京国立博物館から所属換された。

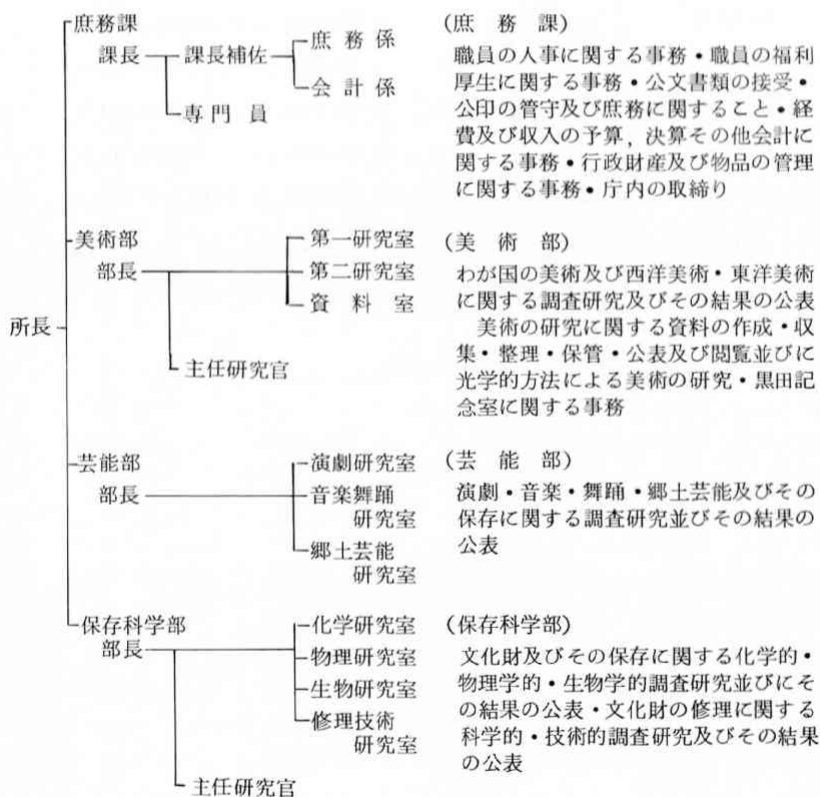
3 歴代所長 (昭和5年~昭和47年)

主 事	正 木 直 彦	(昭和 5. 6. 28 - 昭和 6. 11. 25)
主 事	矢 代 幸 雄	(昭和 6. 11. 25 - 昭和10. 6. 1)
所長事務取扱	和 田 英 作	(昭和10. 6. 1 - 昭和11. 6. 22)
所 長	矢 代 幸 雄	(昭和11. 6. 22 - 昭和17. 6. 29)
所長事務取扱	田 中 豊 藏	(昭和17. 6. 29 - 昭和22. 8. 16)
所 長	田 中 豊 藏	(昭和22. 8. 16 - 昭和23. 5. 11)
所長代理	福 山 敏 男	(昭和23. 5. 11 - 昭和24. 8. 31)
所 長	松 本 栄 一	(昭和24. 8. 31 - 昭和27. 4. 1)
所長事務代理	矢 代 幸 雄	(昭和27. 4. 1 - 昭和28. 11. 1)
所 長	田 中 一 松	(昭和28. 11. 1 - 昭和40. 4. 1)
所 長	関 野 克	(昭和40. 4. 1 - 現 在)

Ⅱ 設立目的と機構

東京国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行なうことを目的として設立された文化庁の附属機関である。その機構等は次のとおりである。

1 機 構



2 職種別予算定員

区 分	46 年 度	47 年 度
指 定 職	1	1
所 長	1	1
行 政 職 (一)	13	13
課 長	1	1
課 長 補 佐	1	1
係 長	2	2
専 門 職	3	3
主 任	—	1
一 般 職 員	6	5
行 政 職 (二)	1	1
技能・労務職員	1	1
研 究 職	32	31
部長等研究員	8	9
室長等研究員	8	9
研 究 員	16	13
合 計	47	46

Ⅲ 土地・建物

本研究の主な建物は、東京都台東区上野公園12番53号所在の本館と、上野公園13番27号所在の保存科学部実験室および別館である。

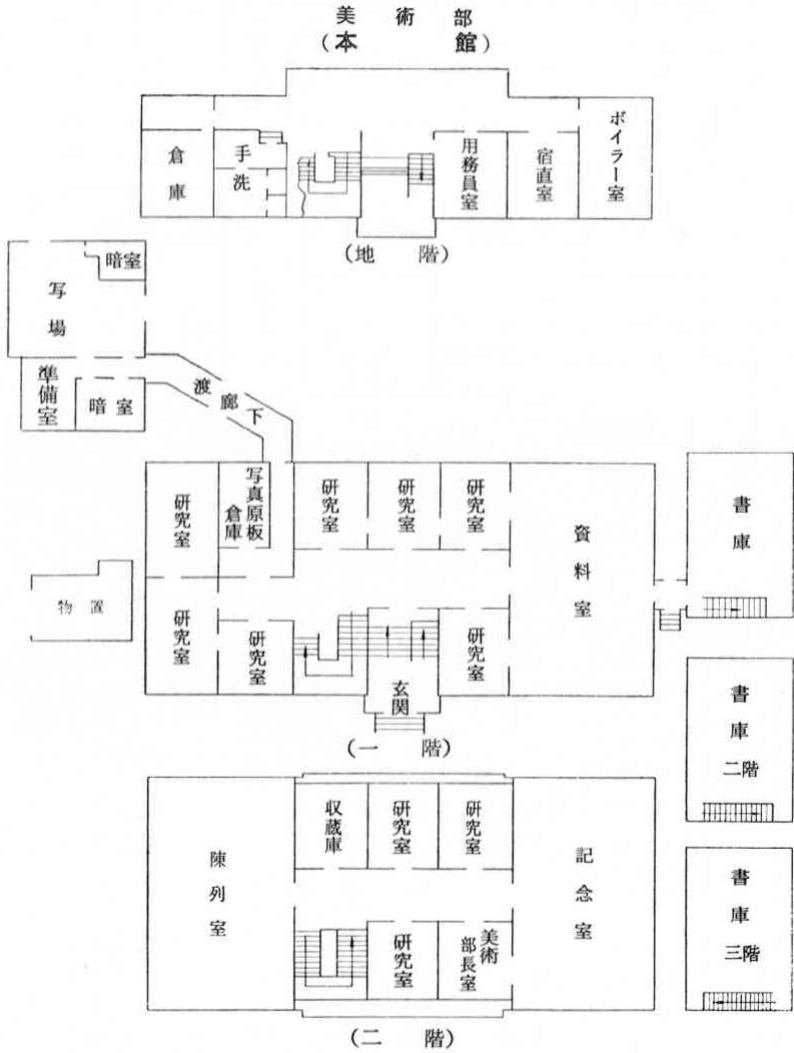
土地は、本館の敷地 1,457 m² 保存科学部実験室および別館の敷地 2,658 m² の計 4,115 m² である。

なお、建物の面積・構造等は、次のとおりである。

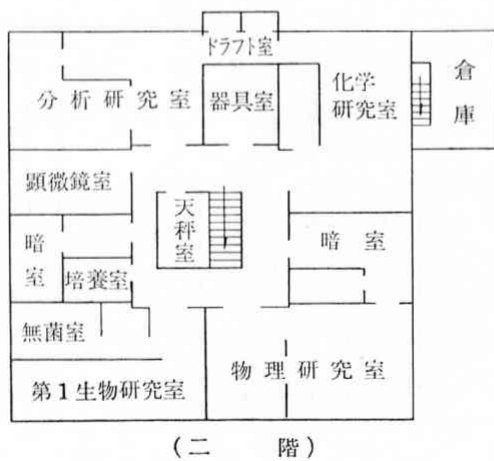
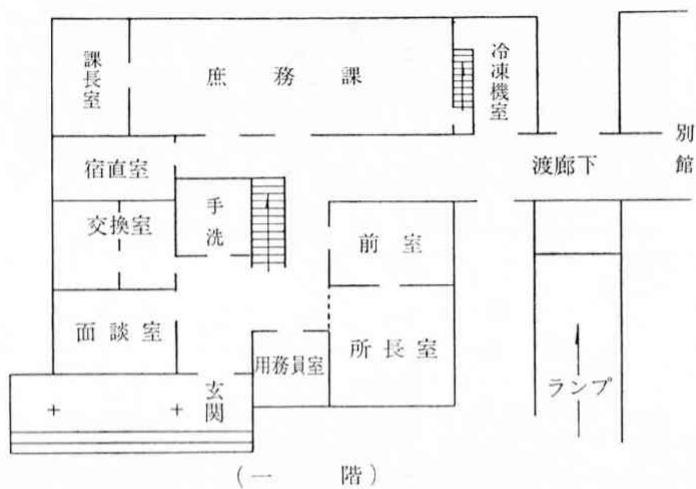
1 建物の面積・構造一覧

No.	名称	種目・構造	延面積 面積	建築年月日	No.	名称	種目・構造	延面積 面積	建築年月日
1	本館	事務所建 RC.地上 2階・地下 1階	$\frac{468.26}{1,192.72}$ m ²	昭 3. 8. 30	6	渡廊下 (写場)	雑屋建 木造平家	$\frac{20.26}{20.26}$ m ²	昭 13. 3. 25
2	書庫	倉庫建 RC. 3階	$\frac{64.63}{201.80}$	" 10. 1. 25 (32. 11. 30) (3階増築)	7	車庫 (現物置)	"	$\frac{27.96}{27.96}$	" 15. 9. 11
3	渡廊下 (書庫)	雑屋建 RC. 平家	$\frac{4.13}{4.13}$	" 10. 1. 25	8	保存科学 部実験室	事務所建 RC. 2階	$\frac{338.41}{684.91}$	" 37. 3. 28
4	写場及 第1暗室	雑屋建 木造平屋	$\frac{62.80}{62.80}$	" 13. 1. 8	9	別館	事務所建 RC. 地下 1階地上3 階塔屋付	$\frac{462.75}{1,950.41}$	" 45. 3. 25
5	準備室及 第2暗室	"	$\frac{35.12}{35.12}$	"	10	渡廊下 (別館)	雑屋建 鉄骨 平造家	$\frac{27.60}{27.60}$	"

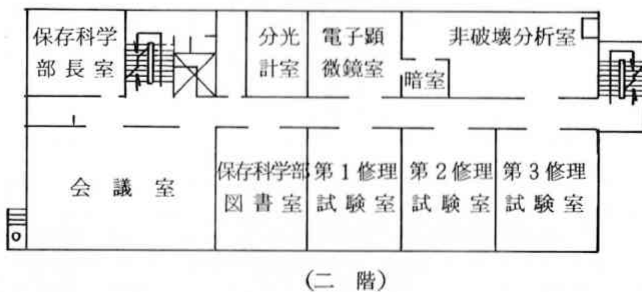
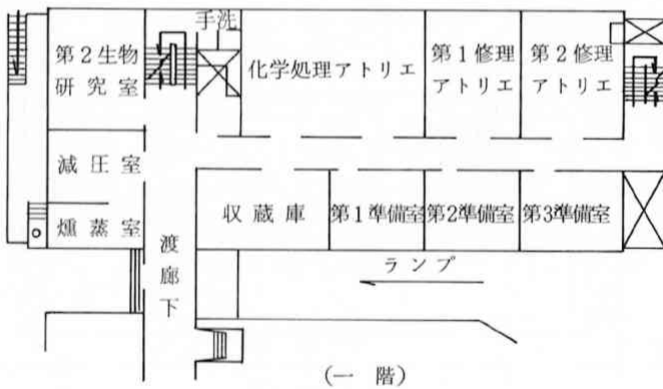
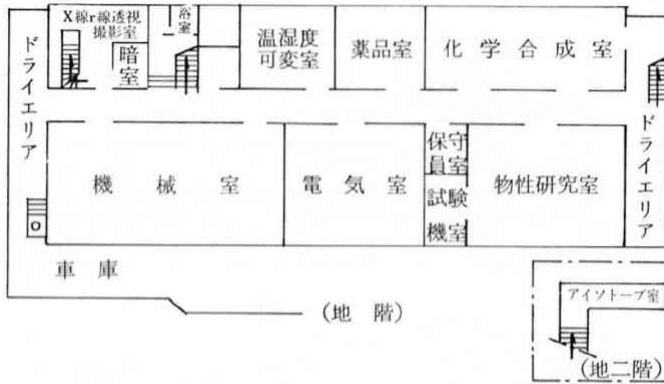
2 建物の平面図 (各庁舎の縮尺不同)

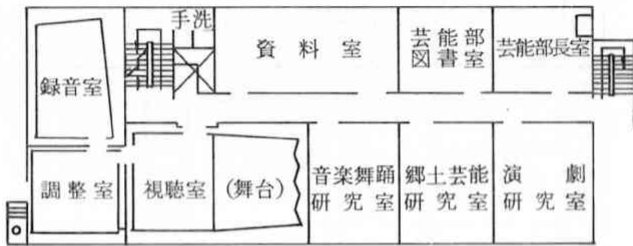


庶務課・保存科学部

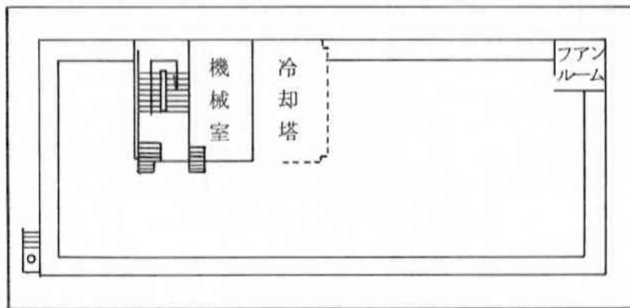


芸能部・保存科学部
(別館)





(三階)



(屋上)

Ⅳ 予 算

1. 歳出予算

(単位千円)

区 分	人 件 費	事 業 費	施設整備費	合 計
昭和46年度	95.534	43.882	1.309	140.725
昭和47年度	105.442	53.555	4.295	163.292

2. 科学研究費補助金交付決定額

(単位千円)

区 分	一般研究		奨励研究		総合研究		合 計	
	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額
昭和46年度	7	16,120	1	140	1	1,400	9	17,660
昭和47年度	2	1,200	—	—	—	—	2	1,200

昭和47年度内訳

研究題目	研究者	金 額	摘 要
語り物芸能の研究	横 道 萬里雄	千円 900	一般研究 C
南都悔過会の研究	佐 藤 道 子	300	一般研究 D

V 研究活動及び事業

1 研究活動

(1) 美術部

美術部は日本・東洋の古美術、日本の近代・現代美術とこれらに関連のある西洋美術についての基礎的調査と専門的研究を行ない、その成果を公表するとともに、美術に関する研究資料を作成、収集、整理し、これらの資料を一般研究者の利用にも供し、美術史学研究における資料センターの役割も果している。現在3室に分かれ、古美術関係は第一研究室、近代・現代・西洋美術は第二研究室、資料関係は資料室が担当する。

調査研究は美術部3室所属研究員の専門領域を中心として実証的に進められているが、学界現下の動向を把握するとともに将来の趨勢を洞察し、方法においても成果においても、基礎的・先駆的役割を果して、広く永く学界に寄与すべく努めている。そのため重要な問題に関しては共同研究を行ない、また当部独自の光学的研究法を活用し、すでに多くの成果を収めている。

これら業績は当部の機関誌「美術研究」（昭和7年創刊、年6冊発行）に発表し、大部の成果は随時単行の研究報告書として刊行している。また毎年のわが国美術界全般にわたる動向を調査し、客観的資料の提供を主眼とした「日本美術年鑑」を編集発行している。

研究資料の収集・作成などに関しては、当部の前身たる美術研究所として発足以来調査研究とともに力をそそいで来たが、年毎に増大する資料の蓄積は、文化財関係事業等のためのみならず、部外研究所や広く海外の研究者のためにも大きな寄与を果している。また「日本美術年鑑」には、毎年日本・東洋古美術ならびに近代・現代・西洋美術に関する雑誌論文および単行図書を分類集録した文献目録を編集し、美術史学界をはじめ関連ある学界に著しく貢献している。なお古美術関係文献についてはさらに増補訂正を加え一定の年次をまとめて既に数冊刊行したが、今後もこれが継承に努めたい。

以上のほか、調査研究成果の一部を広く一般の理解に資するため、毎年1回公開学術講座を開催している。

黒田清輝の遺産と遺作の寄附に基いて創立された、美術部（旧美術研究所）の黒田記念室は、黒田の作品その他関係資料を保管し、毎週一回、一般に公開している。

A 研究・調査活動の概要

○第一研究室及び資料室の研究員は、専門とする日本の各時代の美術、中国、中央アジアの美術の各分野において、それぞれ独自の精密な基礎的調査研究を実施し、乃至たえず資料の収集につとめ、それらの成果を逐次機関誌「美術研究」に発表したほか、他の学術誌や学界においても公表した。また前年度における文部省科学研究費による「日本美術の主要作品に関する基礎的研究」（一般研究A）の成果の整理にあたった。さらに、昭和47年度重要文化資料協議会総会では文化庁の委嘱により美術部が担当して高松塚古墳壁画を中心とする研究発表を行なった。なお文化庁による高松塚古墳壁画の総合調査にあたっては、従来美術部において多年実施してきた光学的方法を採用した調査方法が適用され成果を収めた。

○第二研究室においては昭和44年度より継続中の特別研究「日本近代美術の発達に関する明治前期、中期の基礎資料集成」は前年同様、明治20年代迄の刊行物、作家・美術関係者の書簡、日記、作品、展覧会等の資料について調査を進め、基礎的資料の蒐集を行った。また継続的事业である近代美術史の調査研究、現代美術の動向調査、それ等の資料蒐集にもつとめている。

○各研究員の調査研究、2～3名による共同研究および他機関、大学における科学研究費総合研究への参加などに関しては、各自の研究調査活動の項を参照されたい。なお、機関誌「美術研究」は本年度分281号から286号まで6冊を、「日本美術年鑑」は47年版を刊行した。

B 研究題目

岡 畏三郎（美術部長）

- Ⅰ 明治末より大正期にかけての新絵画運動についての調査研究
草土社、院展洋画部、二科会等の美術団体の活動を主として。
- Ⅱ 日本近代美術の発達に関する明治、前期・中期の基礎資料の蒐集、調査研究
新聞雑誌その他、当時の刊行物、関係資料、作品等を調査し、明治美術研究の基礎的な資料の蒐集を行う。
- Ⅲ 現代美術の動向についての調査研究
第二研究室全員の共同調査研究の中の一つで、洋画、版画を分担し現代作家

並びに作品についての調査を行っている。

久野 健（第一研究室長）

〔I〕平安初期彫刻の研究

日本各地に分布する平安初期彫刻を精査し諸遺品の様式的関係と技法、流派等を明確にする。また天平彫刻と平安初期彫刻との関係を考察する。

〔II〕中部地方彫刻の研究

中部地方に散在する古彫刻を精査し、その東国的性格を明らかにする。また中部地方の遺像と中央彫刻との関係を考察する。

〔III〕白鳳彫刻の基礎的研究

全国に分布する白鳳彫刻、ことに出土した仏像彫刻をも加えて、その様式的展開と地方性を考察する。

〔IV〕光学的方法による日本彫刻の調査研究

X線 γ 線等を利用した光学的方法により、わが国の飛鳥時代から鎌倉時代までの古彫刻の内部構造、造像法を検討し、基礎的資料を集めることに努めている。

田村 悦子（主任研究官）

〔I〕和漢の書蹟及び書道史の研究

- (1) いわゆる文化暗黒時代（室町時代前後）における紊乱した書道の中における新しい美の発生の研究。
- (2) 平安末期・鎌倉初期の書道における、幽玄から顔唐への変遷—俊成から定家へ。

〔II〕異体字の歴史的研究

唐代の影響をうけた日本の異体字の調査研究

柳澤 孝（主任研究官）

〔I〕日本仏教絵画史の研究

平安・鎌倉時代の主要仏画遺品に関して光学的方法を援用する実証的な調査を実施し、技法の解明や様式的特色を明らかにすると共に、図像学的な考察と文献的な考証にも及び、それぞれの作品の位置づけを明確にする。

〔Ⅱ〕古代壁画の研究

- (1) 高松塚古墳壁画の調査研究
- (2) 鳳凰堂壁画に関する調査研究

〔Ⅲ〕敦煌絵画の研究

年記銘ある敦煌請来絹絵仏画に関する調査研究の続行。

宮 次 男 (主任研究官)

〔Ⅰ〕絵巻物の研究

絵巻遺品について網羅的に調査し、その編年の研究を行うことによって、様式の変遷をあとづけ、時代的・流派的特色を明らかにする。

〔Ⅱ〕経典説話図の研究

特に法華経関係説話図について、経巻見返絵及び法華経曼陀羅図を中心に、その図相の選択と定着について調査研究する。

〔Ⅲ〕肖像画の研究

主に似絵・高僧像・頂相を対象とし、その時代的特色と様式の変遷について調査研究する。

〔Ⅳ〕羅漢・十王図の研究

日本中世における羅漢・十王図の受容と、日中作品の比較検討。

猪川 和子 (第一研究室)

〔Ⅰ〕飛鳥・奈良時代彫刻史の研究

飛鳥・奈良時代彫刻における問題点を明らかにし、諸作例を検討し、彫刻史の基礎的研究に資する。

〔Ⅱ〕平安・鎌倉時代彫刻の調査研究

全国に分布する平安時代以降の主要作品を調査し、文献を含めて資料の蒐集整理を行い、時代、作風、技法、作家の系統を考察する。

〔Ⅲ〕尊像別分類による彫刻の研究

尊像別分類により、諸尊の形式上の伝承と発展、種別を究め、歴史的背景を明らかにし、様式的特色、作風、時代変遷等を明確にする。

田実 栄子 (第一研究室)

〔I〕 近世初期染織品の研究

上杉神社所蔵の伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類の調査・研究を中心に、伝徳川家康所用服飾類等同時代の服飾類、名物裂系統外来裂の調査・研究を続行。

〔II〕 小袖の研究

形態の変遷、模様の様式並びに技術・技法の変遷・進展、用布の地質の調査・研究を続行。

〔III〕 伝統的染織の調査・研究

わが国における伝統的染織品並びにその技術・技法の調査を機会ある毎に行つて研究を続行。

〔IV〕 上代裂の研究

主として東京国立博物館保管の正倉院裂、法隆寺裂を調査対象に研究を続行。

関口 正之 (第一研究室)

〔I〕 日本仏教絵画研究

(1) 密教画研究

明王系画像を中心に調査し資料を収集する。

(2) 変相図研究

法華経変相を中心に調査し資料収集に努める。

(3) 仏画の装飾文様の研究

仏教絵画の展開の種々相を考察する参考資料として各種装飾文様を整理し比較研究する。

〔II〕 南詔・大理の仏教美術遺品の研究

中国西南地方に興った南詔国・大理国の仏教美術について西藏・中央アジア美術との関係を考察する。

秋山 光和 (第一研究室) 研究員 (併)

〔I〕 日本古代中世絵画史の研究

a) 高松塚古墳壁画の調査および研究

V 研究活動及び事業

- b) 平安時代初期(9世紀) 装飾文様と彩色法の研究
- c) 院政時代(12世紀) 絵巻物の調査と研究
- d) 鎌倉時代絵巻物(平安物語絵巻・紫式部日記絵巻)の調査と研究

〔II〕 敦煌絵画の研究

- a) 莫高窟壁画の編年的研究
- b) 敦煌将来, 紙・絹絵の研究

中村伝三郎 (第二研究室長)

〔I〕 明治以降彫刻史の研究

- (1) 近代主要木彫家の業績について改めて考究。
- (2) 日本近代彫刻への西欧彫刻の影響に関する実地調査。

〔II〕 現代日本美術の調査研究

彫刻を中心に工芸・絵画の動向を総合的に常時調査考究している。

〔III〕 日本近代美術の発達に関する明治前・中期の基礎資料の調査研究 (特別研究)

関 千代 (主任研究官)

〔I〕 日本近代絵画史の研究

東京芸術大学収蔵狩野芳崖筆写生帖, 素描類についての調査研究。

〔II〕 日本近代美術の発達に関する明治前期, 中期の基礎資料の調査研究

明治前期における古美術調査の実態についての調査(蜷川式胤日記, 今泉雄作日記等についての調査検討をすすめる)。

〔III〕 現代日本絵画の動向についての調査研究。

現代絵画の調査並びに資料蒐集を随時行ない, 現画壇の動向を適確に把握展望すべくつとめる。

坂本 満 (第二研究室)

〔I〕 近世美術における東西交流

16世紀より19世紀に至る汎世界的な美術の交流を絵画を中心として研究。

〔II〕 西欧版画史

15世紀以降の西歐美術における版画の展開とその役割を〔I〕と関連させながら系統的に研究。

- 〔III〕 日本近代美術の発展に関する明治前期・中期の基礎資料の調査。

陰里 鉄郎（第二研究室）

- 〔I〕 大正・昭和初期絵画の調査研究

村山槐多，関根正二の作品および関係資料の調査。昭和初期における画家の小集団の調査研究。

- 〔II〕 初期洋風美術の調査研究

江漢，田善，慶賀など江戸後期洋風画家とその作品についての調査研究

- 〔III〕 日本近代美術の発達に関する明治前・中期の基礎資料の調査研究（特別研究）

- 〔IV〕 現代美術の動向についての調査

川上 涇（資料室長）

- 〔I〕 中国絵画史の研究

中国絵画史研究の基礎作業として，宋元明清画家の作品および伝記資料の蒐集整理を継続。

- 〔II〕 宋元時代羅漢図・十王図の調査。

- 〔III〕 江戸時代絵画における中国画影響の検討。

上野 アキ（主任研究官）

- 〔I〕 中央アジア古代絵画史研究

中央アジア古代絵画遺品の資料収集整理及び様式的検討の続行。

- 〔II〕 敦煌絵画の研究

敦煌壁画及び敦煌画の編年的考察の続行

- 〔III〕 大陸墓葬画の研究

江上 綏（資料室）

- 〔I〕 平安朝書跡資料に施された絵画装飾の研究

V 研究活動及び事業

平安時代の書跡資料に施された絵画的装飾を絵画史的見地から研究する。

〔II〕 日本古代文様の様式的、形式的研究

日本古代文様全体を様式、形式の両面から歴史的に研究する。

鶴田 武良 (資料室)

〔I〕 揚州派の研究

揚州八経を中心に。

〔II〕 近代中国絵画の研究

近代100年の中国絵画の展開を、海上派を中心として研究。

河野 元昭 (資料室)

〔I〕 障屏画の研究

(1) 桃山時代障屏画の研究

(2) 近世以前の障屏画研究

〔II〕 日本画家の研究

(1) 桃山・江戸時代画家の研究

(2) 室町時代画家の研究

C 研究・調査活動 (昭和47・4～昭和48・3)

岡 畏三郎 (美術部長)

- I 大正期における新絵画運動について、当時刊行の諸資料の調査、蒐集のほか、当時活動せる画家、並びに美術関係者、遺族による聞き書き、所蔵資料など、失われたつある記録、資料の保存と蒐集を続けている(継続)
- II また、特別研究として引続き行っている明治美術の基礎資料の調査研究は本年も、展覧会、博覧会、美術団体、教育施設或は作家について広範囲に亘って資料の探索、蒐集につとめた。
- III 版画史の研究については、本年日本で特別展観された欧米各国所蔵の浮世絵版画400点について調査を行った。また、創作版画運動についての資料蒐集も継続して

いる。

久野 健 (第一研究室室長)

昭和47年4月から5月にかけて、茨城県下の古彫刻の調査を行なう。主な寺院としては小山寺十一面観音像、西光院十一面観音像等、30数体に及んだ。7月には和歌山市稲垣氏所蔵の金銅仏等の調査、10月には長野県観松院の菩薩半跏像及び布引山釈尊寺の調査撮影を行なった。11月には白鳳彫刻史研究の一つとして壺坂寺の磚仏等の調査を行なう。12月には細見家蔵の多数の白鳳時代から室町時代にかけての仏像、神像の調査撮影を行ない、昭和48年1月には常滑市教育委員会の依頼により、常滑市及びその付近の仏像彫刻の調査、さらに3月には宝城坊の薬師三尊像をはじめ十二神将像の調査・撮影を行なった。

田村 悦子 (主任研究官)

- [I] (1) いわゆる「後土御門院勾当内侍」風筆蹟による草子類の早筆書写の含有する实用自然にもとづく書芸美の吟味として、特に『こわたの時雨』古写本の精査を継続した。
- (2) 藤原俊成の書芸を広田社歌合・花月百首撰歌稿によって観察し、ついでその子定家の筆蹟、京都御所御物更級日記、尊経閣本土左日記等を調査して、俊成の書風が定家の類唐の書風に推移することを考察した。
- [II] 中国の文字すなわち漢字の形体は南北朝の分裂の時代と唐の天下統一の時代とで大きな差異がみられる。前年度に前者の日本に及ぼした影響を調査研究したのをうけて、今年の後者すなわち唐代の異体字が如何に日本の文書・典籍にあらわれているかを調査研究した。

柳澤 孝 (主任研究官)

- [I] 昨年度科研費「日本美術の主要作品に関する基礎的研究」による仏画(一乗寺蔵天台高僧像、東博蔵千手観音、神護寺蔵釈迦如来像等)の調査結果の整理を続行したほか、特に大仏頂受荼羅に関する遺品の調査と図像学的研究を行なった。
- [II] (1) 高松塚古墳総合学術調査会の専門委員として、同古墳壁画の双眼実体顕微

鏡による観察と写真撮影とを行なったほか、壁画の報告書作製に協力。

- (2) ユネスコ東アジア文化研究センターの仏教美術調査専門委員会の委員として、鳳凰堂の総合調査に参加、その壁画の調査研究を2回にわたって実施した。
- (III) 敦煌請来絹絵仏画については、来朝したフランスの学者と意見を交換し、同時に新知見をも得ることができた。
- (IV) 前記ユネスコ東アジア文化センターの依頼により、1960年～69年の間における仏教美術関係文献目録の収集と編集とを分担した。

宮 次 男 (主任研究官)

- (I) 南北朝～室町時代の絵巻遺品について調査を行い、特に久保家蔵西行物語絵巻の西行絵の中での位置を検討した。また徒然草絵巻(海北友雪筆)など、従来未調査であった作品についての調査を行った。
- (II) 立本寺蔵法華經金字塔曼陀羅の調査を続行するとともに談山神社蔵法華經金字塔曼陀羅の調査・撮影を行い、さらに大阪市立博物館で開催された「法華經美術」展に出陣された本興寺蔵法華經ほか多数の法華經絵について調査を行った。
- (III) 前年につづき、大和絵肖像画について文献・遺品両面から検討を加え、大和絵肖像画の発生について考察を進めた。
- (IV) 円覚寺・建長寺・光明寺等鎌倉寺院の所蔵する羅漢・十王図及び、京都妙心寺蔵の羅漢図及び中国絵画、奈良国立博物館寄託の中国絵画を調査した。

猪川 和子 (第一研究室)

研究題目Ⅰに関しては、新薬師寺十二神将の形式的特色を調査し、同時代神将形像と比較検討を行っている。

Ⅱの平安時代以降については、石山寺の諸像を調査し、まとめた。また、薬師寺十一面観音像、和歌山金剛宝寺諸像他の平安時代彫刻を調査。鎌倉時代の善円作の西大寺愛染明王、善慶等作の西大寺釈迦如来像の胎内納入文書の調査を行い、善円とその後継者の作品についての考察を行った。

Ⅲの尊像別の研究としては、上記の諸像のほかに、京都善峰寺、革堂、大阪法案寺大念寺、和歌山粉河寺の諸像を調査した。

田実 榮子 (第一研究室)

研究題目の中、特に力を注いでいる「近世初期染織品の研究」は、前年度三つの科学研究費を受けて頻繁に行った実物調査及び写真撮影の整理を行うことに主力をおき、なお研究を進めた。

「小袖の研究」は、前年度一般書として至文堂から「小袖」を出版したが、機会あるごとに調査・研究を進めており、遠からず専門の研究書にまとめたいと努力している。

「伝統的染織の調査・研究」は、この年は「型染」に関するものを主に行い、「上代裂の研究」は機会あるごとに行った。

関口 正之 (第一研究室)

変相図研究においては宇佐神宮旧蔵の法華経絵10面について調査を行ない、大阪市立博物館において同館主催の法華経の美術展出陳作品を調査し資料の収集を行なった。

明王系画像の研究と南詔大理の仏教美術の研究については文献資料収集を継続して行なった。

中村伝三郎 (第二研究室長)

[I]本年度は特に短期文部省在外研究員として、研究題目「20世紀におけるヨーロッパ彫刻の調査研究」のもとに、7月20日から9月19日までの2カ月間、イタリア各地を中心に、西ドイツ、オランダ、フランス、連合王国など西欧7カ国へ出張の機会に恵まれたので、古今の西欧彫刻が明治初期以来の彫刻界の展開発展に顕著な影響を及ぼした源泉に関して実地に踏査することが出来、今後の彼我の比較研究に更に理解と認識を深めた。

研究題目〔II〕及び〔III〕に関しては、前年度に引続き、調査並びに資料の蒐集につとめた。

関 千代 (主任研究官)

[I] 東京芸術大学收藏の狩野芳崖作品中、本年は写生類のうち「奈良官遊地取」(12巻)についての調査を行い、その結果を美術研究にまとめた。なお、調査

V 研究活動及び事業

にあたっては奈良に出張し、法隆寺ほか諸寺の什宝について、作品との実地検討を行った。

- 〔II〕 明治前期における古美術調査の実態は、未だ明らかにされていないが、これをうめるに極めて貴重な資料である蜷川式胤日記、今泉雄作日記等につき調査をすすめた。
- 〔III〕 IIIについては、諸展観、出版物等について調査並びに資料蒐集を行い、現代美術の動向把握につとめる。

坂本 満 (第二研究室)

- 〔I〕 ヨーロッパと日本の近世初期美術の交流のうち、これまでの研究と資料の一部を至文堂・日本美術80「初期洋風画」に発表した。
- 〔II〕 西洋の版画史は日本ではまだ組織的な研究がなされていないが、パリの国立図書館での調査を中心として系統的な版画史を内外の専門家と共同して筑摩書房世界版画大系に編成し、刊行中である。

陰里 鉄郎 (第二研究室)

先年度に引続き文部省在外研究員として47年8月まで滞欧し、4月以降パリ国立図書館において主として18世紀版画資料を調査し、その間にイタリアにおいてフォンタネージの作品、キヨソーネ蒐集日本美術などを調査する機会を得た。これらの一部は47年度美術部公開講座において発表した。

〔I〕に関しては、萬鉄五郎に関する調査をほぼ終了したので、村山槐多、関根正二の関係文献の調査を続行中である。

川上 涇 (資料室長)

昭和47年7月に妙心寺所蔵および奈良国立博物館寄託の宋元時代羅漢図・十王図の調査撮影、昭和48年1月には鎌倉国宝館寄託の同種作品の調査撮影、昭和47年11月に本間美術館・秋田市美術館・大悲寺・加賀谷保吉氏所蔵寄託の明清画ならびに江戸時代絵画の調査を行った。

上野 アキ (主任研究官)

中央アジア古代絵画史についての資料収集整理を続行中であるが、46年度は西域東部の美術について従来の知見に基いて概観を発表する機会を得、同じく敦煌の壁画についても編年史的に概観を試みた。

なお高松塚の発見に伴ない、源流としての大陵墓葬画の諸相につき考察を加えた。

江上 綏 (資料室)

47年3月から5月にかけて、米国所在の博物館その他(ボストン美術館、メトロポリタン美術館、フリア美術館等)に所蔵される古代絵画・文様関係作品と関連資料を調査した。日本古代文様の大陸との関係に関する研究も継続した。

鶴田 武良 (資料室)

〔I〕 京阪地方所在の揚州派作品の調査を行った。

〔II〕 1840年以降の近代中国絵画について作品の調査・撮影と文献資料の蒐集を行った。

河野 元昭 (資料室)

昭和47年度科学研究費補助総合研究「江戸時代絵画における中国画影響の研究」(代表者辻惟雄東北大学助教授)の研究分担者の一人として、その東北地方調査旅行に参加し、資料の収集に努めた。本調査旅行は47年11月18日から24日に亘り、仙台博物館、山形美術博物館、西塔家、高橋家、庄司家、致道博物館、風間家、本間美術館、秋田市立美術館、大悲寺、加賀家、秋田県立美術館準備事務局仮倉庫、秋田県庁知事室、奈良家において行われた。また同年12月と48年1月の二度に亘り、栃木県立美術館においてその開館記念展覧会出品作品を調査研究撮影した。中心をなしたものは栃木県と関係の深い画家の手になる近世絵画である。さらに48年3月、東京大学美術史研究室の企画した「加賀能登地方に遺る近世絵画の研究」に参加し、石川県美術館および個人宅において、宗達派の作品を中心に調査を行った。

D 主要研究業績 (①:著書 ②:論文 ③:解説
④:研究発表⑤:講演・放送⑥:その他)
昭47・4～昭48・3

岡 長三郎 (美術部長)

- ①風景版画 至文堂 47・1
 ①清長(共著) 学習研究社「在外秘宝・清長」47・7
 ①岸田劉生 集英社「現代日本美術全集」47・12

久野 健 (第一研究室長)

- ①壁画古墳の謎(上田正昭氏等三氏と共著) 講談社 47・6
 ②蛇彫仏像論 仏教芸術85 47・4
 ②新薬師寺本堂の薬師如来像について 国華948 47・8
 ②高松塚古墳壁画の周辺—白鳳文化の重層性—
 中央公論社「高松塚古墳と飛鳥」 47・9
 ②新薬師寺の十二神将像について 美術研究281 47・10
 ②国東半島の古彫刻 国華954 48・1
 ②日本のなかの朝鮮渡来仏 学生社 古代史講座月報 48・2
 ②平安初期における如来像の展開 中 美術研究283 48・3
 ②平安初期における如来像の展開 下 美術研究284 48・3
 ④東北古代の彫刻 仙台市文化会館 47・5
 ④高松塚古墳壁画と薬師寺薬師寺三尊像 美術部研究会 47・5
 ④高松塚古墳壁画と白鳳彫刻 文化庁重要文化資料選定協議会総会 47・7
 ④辺境の仏像 N・H・Kテレビ 47・7
 ④秘仏開帳 N・H・Kラジオ 47・9
 ④霊木と仏像, 神像
 東京国立文化財研究所開所20周年記念講演会 朝日講堂 47・12

田村 悦子 (主任研究官)

- ②吉田忠氏蔵古写本「こわたの時雨」公刊 上 美術研究282 47・7

- ③『広田社二十九番歌合』『花月百首撰歌稿』その他藤原俊成書状・消息等
中央公論社「書道芸術16巻」 47・6
- ③定家書写の『土左日記』
三一書房「美の旅日本史」 48・1

柳澤 孝 (主任研究官)

- ①扇面法華經(秋山光和, 鈴木敬三と共著) 鹿島研究所出版会 47・5
- ②日本の密教絵画の占める位置 重要文化財付録2 48・1
- ②日野原家本大仏頂曼荼羅について 美術研究 285 48・3
- ③世界美術小辞典 仏教図像 芸術新潮274, 275 47・10
~11
- ③慈尊院弥勒仏像台座蓮弁の裝飾文様(秋山光和と共同執筆)
美術研究 283 48・3
- ④高松塚古墳壁画 文化庁重要文化資料選定協議会總會 47・7

宮 次 男 (主任研究官)

- ②西行物語絵巻・公刊 美術研究 281 47・5
- ②立木寺藏妙法蓮華經金字宝塔曼陀羅図について 美術研究 282 47・7
- ③絵巻入門(14~24) 日本美術工芸 403~413 47・4
~48・2
- ③拾遺古徳伝絵巻残欠 古美術38 47・9
- ③一遍上人絵伝残欠(金光寺本) 古美術39 47・12
- ③永徳元年の一遍上人絵伝残欠 古美術39 47・12
- ③空飛ぶ米・信貴山縁起絵巻 三一書房「美の旅日本史」 48・1
- ③信実と後鳥羽上皇 三一書房「美の旅日本史」 48・1
- ③海北友雪筆徒然草絵巻 古美術40 48・3
- ④法華經文字塔(立木寺本)について 美術部研究会 47・10
- ⑤源氏物語絵巻について一源氏絵とその伝統一 五島美術館 47・5

猪川 和子 (第一研究室)

- ①石山寺 中央公論美術出版 47・11
- ②名匠善円とその後継者たち 日本美術工芸 406 47・7

V 研究活動及び事業

- ②万寿寺阿弥陀如来像の伝来について ミュージアム 258 47・9
 ③運慶と快慶の彫刻 大法輪 47・6

田実 榮子 (第一研究室)

- ②吉川家伝来「山道草花鶴亀文緞笥胴服」について 美術研究 286 48・3
 ③染織用語解説の分担〈世界美術小辞典〉 芸術新潮 271, 272 47・7
 ~8

関口 正之 (第一研究室)

- ③仏教図像〈世界美術小辞典〉 芸術新潮 274, 275 47・10
 ~11
 ③国宝山越阿弥陀図 月刊文化財 114 48・3

秋山 光和 (第一研究室) 研究員(併)

- ①扇面法華経(柳沢孝, 鈴木敬三と共著) 鹿島研究所出版会 47・5
 ②高松塚古墳の壁画一画面構成とその絵画史的意義
 中央公論社「高松塚古墳と飛鳥」 47・9
 ②平治物語絵巻三条殿夜討の巻について 仏教芸術 90 48・2
 ③紫式部日記絵巻の絵画(附)五島本第一段画面解説
 日本古典文学会「覆刻紫式部日記絵巻」解題 47・10
 ③慈尊院弥勒仏像台座蓮弁の装飾文様(柳沢孝と共同執筆) 美術研究 283 48・3
 ④紫式部日記絵巻(日野原家本)について 美術部研究会 47・11

中村伝三郎 (第二研究室長)

- ③西森正昭「平和の像・高山右近」(人と作品) アート・トップ 47・5
 ③中村彝の「老母像」(好きな作品) サンケイ新聞 47・5
 ③「建築とともにある彫刻展」第1回開催の意義 商店建築 206 47・12
 ③「天才」学究の絵画実践 進藤隆夫画集 48・2
 ⑤西欧彫刻と日本 東京芸大彫刻科 47・11
 ⑤現代美術の動向と展望-ヨーロッパより帰って- 現代工芸東京会 47・11
 ⑤近代木彫の成立 東京国立近代美術館 48・3

- ⑥ヨーロッパ美術あれこれ 美術部研究会 47・12
 ⑥第4回日展第三科(彫塑)評 新美術新聞 47・12

関 千代 (主任研究官)

- ①上村松園(近代の美術12) 至文堂 47・9
 ②芳崖の写生帳 上 —「奈良官遊地取」について— 美術研究286 48・3
 ③桃山・江戸・明治300年の美術(上野の森美術館開館記念展目録明治解説) 47・4
 ③前田青邨作品集解説 朝日新聞 47・5
 ③高橋由一筆「花魁図」解説 月刊文化財104 47・5
 ③世界美術小辞典 近代明治以降の美術解説 芸術新潮278,279 48・2
 ~3

坂本 満 (第二研究室)

- ①世界版画大系(第1巻) 筑摩書房 47・9
 “ (第2巻) 筑摩書房 47・11
 “ (第3巻) 筑摩書房 48・1
 “ (第4巻) 筑摩書房 48・3
 ①初期洋風画(日本の美術80) 至文堂 47・12
 ①ティントレット(ファブリ名画集) 平凡社 47・12
 ①エル・グレコ(アート・ライブラリー) 鶴書房 47・12
 ②国際マニエリスム(大系世界の美術15) 学習研究社 48・2
 ③石川孟高筆「少女愛猫図」の原画「ミス・トリンマー」(図版解説)
 美術研究282 47・12
 ⑤カトリック改革と洋風美術 美術部公開学術講座 47・10

陰里 鉄郎 (第二研究室)

- ③加山又造のヌード 芸術新潮277 48・1
 ③世界美術小辞典 日本編・絵画(近代) 芸術新潮278,279 48・2
 ~3
 ⑤西欧啓蒙主義と洋風表現 美術部公開学術講座 47・10
 ⑥新製作他公募展評 共同通信 47・9
 ⑥「現代の眼—近代日本の美術から」展評 みづゑ813 47・10

V 研究活動及び事業

川上 涇 (資料室長)

- ①東洋美術全史 (共著) 東京美術 47・6

上野 アキ (主任研究官)

- ①東洋美術全史 (共著) 東京美術 47・6
 ②敦煌本幡画伝図考 (下) 美術研究 286 48・3
 ④高松塚と大陸の墓葬画 美術部研究会 47・5
 ④高松塚古墳壁画と朝鮮中国の墓葬画 文化庁重要文化資料選定協議会総会 47・7

江上 綏 (資料室)

- ②三十六人集料紙裝飾における対位法的響き合い 国華 946 47・6
 ②安宅切料紙下絵の特殊性 一平安世俗山水画と経絵の一接点一 美術研究 284 47・11
 ④在米日本絵画調査報告 美術部研究会 47・9
 ④米国に於ける日本・中国絵画見聞記 (辻惟雄氏, 戸田祐佑氏と共同) 美術史学会東京支部例会 47・10

鶴田 武良 (資料室)

- ②芥子園画伝について 美術研究 283 48・3
 ③中国画図版解説 (水墨画三) 毎日新聞社 48・2

河野 元昭 (資料室)

- ①障壁画全集・醍醐寺三宝院 (共著) 美術出版社 47・4
 ②大乘寺と円山派作家 国華 945 47・4
 ②大乘寺円山派関係文書 国華 945 47・4
 ②応挙年譜 国華 945 47・4
 ②1971年の歴史学会—回顧と展望— (近代美術史) 史学雑誌 81—5 47・5
 ②森狙仙研究序説 国華 950 47・9
 ③円山応挙筆郭子儀図 国華 945 47・4
 ③源琦筆梅水禽図 国華 945 47・4
 ③水墨画・式 (図版解説) 毎日新聞社 47・6
 ③万有百科辞典・美術 (項目解説) 小学館 48・2

E 科学研究費題目

（本年度科学研究費補助金交付なし）

(2) 芸能部

芸能部は、日本の伝統芸能の保存に資するために必要な基礎的理論的研究を行なう。

芸能部は、演劇研究室・音楽舞踊研究室・郷土芸能研究室の三室より成る。

演劇研究室においては、日本古典演劇（主として歌舞伎・人形浄瑠璃などの近世演劇）を、音楽舞踊研究室においては、日本古典音楽及び日本古典舞踊（雅楽・声明・平曲・能・邦楽・邦舞など）を、郷土芸能研究室においては、全国各地に分布して伝統芸能の源流や展開の過程を示す民俗芸能を、それぞれの研究対象とする。

各室の研究目標としては、以上の諸芸能の理念・構造・技法・技術及びその継承保存に関する研究などがあり、その研究に必要な資料の収集・整備、記録の作成としての撮影・録音などの作業を行なう。また研究の結果は、刊行・講演会の開催などによって公表する。

A 研究・調査活動の概要

芸能部全員による共同作業としては、20年間に蓄積された膨大な資料整理の完璧を期する目的により、本年度は図書資料の整備に集中し、必要な諸カードを完成した。従って、共同研究は各室単位に行ない、随時、他の研究室員の応援参加によって研究調査活動を行なった。

演劇研究室においては、(1)各地の大学・図書館所蔵の演劇資料の調査・撮影・整理を続け、(2)農村舞台・かけ踊りの調査・録音・撮影を行なった。その他、各室員の研究・調査活動欄に記した通りである。

音楽舞踊研究室においては、共同研究として、(1)語り物芸能の研究、(2)寺院行事の研究、(3)能の様式の研究を続行した。(1)については、各宗の法会における語り物要素

V 研究活動及び事業

の分析解明を進めた。特に天台宗・新義真言宗・華嚴宗に重点を置いた。(2)については、南都諸寺・延暦寺の主要行事、岩戸寺・毛越寺の春迎え行事の調査を行なった。(3)については、前年度に引続き、能楽全般にわたる構成および技法の研究成果を公表する準備を行なった。なお、芸能部録音室において、豊沢猿公の演奏により、義太夫節のメリヤス、住田長之助・福原百之助の演奏により、長唄における能管の曲を録音した。

郷土芸能研究室においては、沖縄への渡航を初め、各県に出張しての実地調査のほか、東京における全国民俗芸能大会や、ブロック別の地方大会に出場した芸能の撮影録音などを行なった。また民謡歌詞集成の研究については、各地伝承の民謡歌詞を既刊書目・現地調査資料等から収集する作業を続けた。

別に、音楽舞踊・郷土芸能の各研究室においては、安原コレクション邦楽レコードの整理を続け、それぞれ「音盤目録」Ⅲ・Ⅳの刊行の準備を進めた。

なお、各研究室は人員寡少のため、随時、他の研究室員の応援参加によって作業を進め、「芸能の科学」4として「芸能資料集」Ⅲを刊行した。

B 研究題目

浦山 政雄 (芸能部長)

(I) 近世戯曲の系統的研究

歌舞伎脚本・浄瑠璃丸本・役者評判記・番付類の基礎資料により、近世戯曲の歴史の変遷を系統別に検討する。

(II) 歌舞伎演出史の研究

歌舞伎脚本・役者評判記・画証資料などによる演技演出の歴史の変遷を、現行の演出と比較し、歌舞伎演技譜の形にして標準的演出を記録する。

中村 茂子 (演劇研究室)

(I) かけ踊の研究

かけ踊の発生と変遷および現状を明らかにする研究。

(II) 関東の神楽の研究

能の型付を基本に神楽譜を作成する。

〔Ⅲ〕 郷土芸能伝承方法の研究

若者組（青年団）における郷土芸能伝承方法の研究。

宮本 瑞夫 （演劇研究室）研究員（非）

〔Ⅰ〕 地方芸能文化史における舞台の研究

全国に分布する農村舞台のうち、とくに人形芝居・歌舞伎芝居など近世劇舞台の変遷・現況を明らかにし、あわせて、その伝承芸能・文献資料を調査する。

〔Ⅱ〕 近松周辺の浄瑠璃作者の研究

近松の周辺作家について、その伝記・作品・方法の研究。とくに西沢一風の浄瑠璃作品の調査研究。

〔Ⅲ〕 享保期歌舞伎の研究

歌舞伎台帳・絵入り狂言本・役者評判記・番付などによる享保期歌舞伎の研究。とくに市山助五郎・嵐小六など享保期役者の調査研究。

横道 萬里雄 （音楽舞踊研究室長）

〔Ⅰ〕 語り物芸能の研究（共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

〔Ⅱ〕 能の様式の研究（共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

〔Ⅲ〕 各宗派声明・寺院行事の比較研究

佐藤道子技官を中心とする研究に参加した。

佐藤 道子 （音楽舞踊研究室）

〔Ⅰ〕 寺院行事の研究

寺院行事が内包する多種多様な要素の中から、芸能的要素を抽出し、各宗各派にわたる総合的比較研究を行ない、その変遷・分化をあとづける。

〔Ⅰ〕 各宗派声明の比較研究

各宗派に共通の声明について、用法・奏演形式・発声法等の分析研究を行な

い、その異同を明らかにし、特定宗派の独特な声明については、同様の方法で特色を明らかにする。

(2) 寺院に存在する呪師芸の研究

呪師芸と芸能との関連をたどるため、密教行事を中心として、寺院行事に現存する呪師芸について調査研究を行なう。

〔II〕 語り物芸能の研究（共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

〔III〕 能の様式の研究（共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

松本 雅 （音楽舞踊研究室） 研究員（非）

〔I〕 語り物芸能の研究（共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

〔II〕 能の様式の研究（共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

〔III〕 能の脚本史の研究

能の脚本史における〈二場形式〉の成立過程について。

三隅 治雄 （郷土芸能研究室長）

〔I〕 沖縄の民俗芸能の研究

琉球列島、とくに沖縄諸島に伝承される民俗芸能の分布についての調査と、芸能の分類に関する研究。

〔II〕 獅子舞の研究

全国各地に広い分布を示す獅子舞の調査研究。当面、種目別分布図の作成を行なう。

〔III〕 民謡歌詞集成の研究（共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

〔IV〕 神楽芸の研究

わが国の神事芸能を代表する神楽芸の歴史と分布に関する調査研究。

仲井幸二郎 (郷土芸能研究室) 研究員 (非)

〔I〕 郷土芸能の研究

前年度にひきつづき、民俗芸能の行なわれる場所に関する研究、及び郷土芸能に発唱される詞章の芸謡的要素に関する研究。

〔II〕 民謡の研究

「民謡の民俗学的研究」「民謡研究の目的を究明する研究」の一環として、特に芸謡的要素を持つ民謡に関する研究。

〔III〕 話芸・寄席芸の研究

邦楽レコードの分類により、落語を主として話芸・寄席芸を対象とする近世芸能の研究。

〔IV〕 民謡歌詞集成の研究 (共)

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

C 研究・調査活動 (昭47・4～昭48・3)

浦山 政雄 (芸能部長)

近世戯曲の系統的研究のため、天理大学図書館・阪急学園池田文庫などの歌舞伎台帳を調査した。また愛知県西尾市立図書館岩瀬文庫・東京芸大図書館・国立国会図書館・早稲田大学演劇博物館・東京大学図書館に所蔵される江戸三座紋番付について再調査し、紋番付所在一覧を公表した。なお京阪歌舞伎の役割番付について調査し、所在確認を続行中である。

歌舞伎演出史の研究のため、歌舞伎音楽、特に下座音楽及びチョボの五線譜化を続け、舞踊譜に準ずる演技譜表出方法について研究考察を試みた。

中村 茂子 (演劇研究室)

かけ踊および郷土芸能伝承方法の調査を行なうため、長野県下伊那郡天竜村大河内のかけ踊・木曾郡上松町の獅子神楽の録音・撮影を行なった。

神楽譜作成のためシネフィルムによる神楽の型の分析を行なった。

宮本 瑞夫 (演劇研究室) 研究員 (非)

農村舞台の研究のため、愛知県常滑市・同県知多郡美浜町・岐阜県高山市・東京都板橋区などの近世劇舞台およびその芸能を調査・記録した。

近松周辺の作家研究のため、実践女子大図書館、日大図書館・天理図書館・演劇博物館・東京国立博物館・東洋文庫・大阪府立図書館・鶴舞図書館・大谷図書館・彰考館などで、主として浄瑠璃本の調査・写真撮影を行なった。

享保期歌舞伎の研究のため、役者評判記により、市山助五郎・嵐小六の芸評カードを作成・整理した。

その他、雑誌「歌舞伎新報」の索引カードを作成・整理した。

横道 万里雄 (音楽舞踊研究室長)

語り物の研究・能の様式の研究については、年間調査活動の概要欄に記した通りである。

各宗派声明・寺院行事の研究については、東大寺・法華寺・中宮寺・法輪寺・岩戸寺・毛越寺・延暦寺等について調査を行ない、また、東・西本願寺・四天王寺・金剛峯寺等について基礎調査を行なった。なお、朝日ソノラマレコード「お水取り-東大寺修二会-」の監修を行なった。

佐藤 道子 (音楽舞踊研究室)

東大寺修二会については、41年度以降、継続的に研究調査を実施しているが、本年度は、朝日ソノラマレコード「お水取り-東大寺修二会-」の製作監修、および解説を行なった。東大寺修二会と関連して、梅過会を中心に、全国主要古寺の法要行事の調査を行ないつつある。本年度は、中宮寺修二会・法輪寺修二会・岩戸寺修二会・長谷寺修二会についての調査を行なった。

また、延暦寺の主要行事の調査を、44年度から実施しているが、本年度は、御修法・恵心講・辰張忌について調査を行なった。

その他、東・西本願寺、四天王寺、金剛峯寺等の年中行事の基礎調査を行なった。

語り物芸能の研究、能の様式の研究については、年間調査活動の概要欄に記した通りである。

松本 雍 (音楽舞踊研究室) 研究員 (非)

前年に続いて今年は鬼能を取り上げ、作品の分類・分析 (特に小段構成について) をおこなった。また、演能調査を続行した。

語り物芸能の研究、能の様式の研究については、年間研究活動の概要欄に記した通りである。

三隅 治雄 (郷土芸能研究室長)

沖縄の民俗芸能の研究のため、八月と九月、および昭和48年3月、沖縄諸島へ渡り、沖縄本島のエイサー・ウンジャミ等、操り獅子舞、八重山諸島石垣島のアンガマ、獅子舞、与那国島の歌謡、組踊等の芸能を調査し、撮影・録音を行なった。

獅子舞に関しては、青森県下北半島の権現舞、関東地方の三匹獅子、東京の大神楽、長野県の神楽獅子などの調査研究を行なった。

神楽芸の研究は、当面、長野県南部に伝承される湯立神楽の調査を中心とし、天竜村坂部、大河内に伝わる旧霜月執行の神楽を実地調査し、撮影録音を行なった。また青森県下北地方の能舞、鹿児島県地方の神舞の調査研究を行なった。

そのほか、例年の通り、全国民俗芸能大会や地方のブロック別民俗芸能大会の撮影録音を行なった。

民謡歌詞集成の研究については、年間研究調査活動欄に記した通りである。

仲井幸二郎 (郷土芸能研究室) 研究員 (非)

民謡の研究に関しては、『日本民謡辞典』(共著)をまとめ、刊行するとともに、各地民謡歌詞のカード化を続け、さらにそのうちから、芸謡的要素をもつ民謡歌詞の選別を行なっている。

「伊勢・熊野信仰」の研究を目的として、伊勢、南紀地方の現地採集調査を行なった。

民謡歌詞集成の研究については、年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

D 主要研究業績 (①:著書 ②:論文 ③:解説
④:研究発表⑤:講演・放送⑥:その他)
昭47・4~昭48・3

V 研究活動及び事業

浦山 政雄 (芸能部長)

- | | | |
|--------------|------------|-------|
| ①鶴屋南北全集 第3巻 | 三一書房 | 47・5 |
| ②江戸三座紋番付所在一覧 | 芸能の科学4 | 48・3 |
| ③舞踊解説 | 国立劇場プロ | 47・4 |
| ③国家指定芸能演目解説 | 国立劇場プロ | 47・10 |
| ③西鶴と演劇 | 日本古典全書附録 | 48・3 |
| ⑤江戸時代の芸能 | 文化財指導者養成講座 | 47・10 |

中村 茂子 (演劇研究室)

- | | | |
|------------------|--------|------|
| ②信州大神楽台本集 (共同執筆) | 芸能の科学4 | 48・3 |
|------------------|--------|------|

宮本 瑞夫 (演劇研究室) 研究員 (非)

- | | | |
|----------------------|------------|--------------|
| ③「現代世界百科事典3」民俗・風俗 項目 | 講談社 | 47・4 |
| ③曰と農村舞台 (研究大会発表要旨) | 近世芸芸20 | 47・4 |
| ③現代の郷愁「下駄」 | ホームキンダー | 47・10 |
| ③栃木県栗山村川俣の二十日正月と地芝居 | まつり20 | 47・10 |
| ③お正月の行事 | キンダーブック | 48・1 |
| ④農村歌舞伎舞台仮設の一形式 | 近松の会 | 47・5 |
| ⑥「歌舞伎評判記集成1～2」 (共同) | 岩波書店 | 47・9
48・2 |
| ⑥新撰狂哥集 翻刻と索引 (共同) | 立教大学日本文学29 | 47・12 |

横道 萬里雄 (音楽舞踊研究室長)

- | | | |
|---------------------------|------------|-------|
| ②能の現行小書 (共) | 芸能の科学4 | 48・3 |
| ⑤能の特質とその現状 | 文化学院 | 47・10 |
| ⑤能について | 日本文化研究国際会議 | 47・11 |
| ⑥レコード「お水取り-東大寺修二会-」監修 (共) | 朝日ソノラマ | 47・3 |

佐藤 道子 (音楽舞踊研究室)

- | | | |
|-------|--------|------|
| ③お水取り | 朝日ソノラマ | 46・5 |
|-------|--------|------|

⑥レコード「お水取り-東大寺修二会-」監修・解説(共) 朝日ソノラマ 47・3

松本 雅 (音楽舞踊研究室) 研究員(非)

- ②「布留」の作者について 能-研究と評論- 47・12
②能の現行小書(共) 芸能の科学4 48・3
④神楽の系譜 月曜会例会 47・4
⑥感想と批評 能楽タイムズ 48・3

三隅 治雄 (郷土芸能研究室長)

- ①日本民謡辞典(共編著) 東京堂出版 47・9
①日本民俗芸能概論 東京堂出版 47・10
①原日本おきなわ 第三文明社 47・12
②妹背山の説話世界 歌舞伎18 47・10
②民俗芸能の成立と伝承 解釈と監賞475 48・1
②信州大神楽台本集(共同執筆) 芸能の科学4 48・3
③なまはげの世界 朝日ソノラマ3月号 48・3
④おびしゃの周辺 房総文化研究会 47・6
④沖縄の社会と民俗文化(シンポジウム) 九学会連合大会 47・5
⑤沖縄の生活と芸能 朝日女性サークル 47・5
⑤南島の日本芸能史 西角井博士賞記念講演会 47・6
⑤関東の神楽 日本歌謡学会大会 47・6
⑤芸能の今と昔 日本照明家協会 47・7
⑤関東の民俗芸能 川崎市民大学講座 47・9
⑤樹魂と芸能 研究所開所記念講演会 47・12
⑥レコード「御冠船踊」監修・解説 日本ビクター 47・10
⑥レコード「神縄のうた」監修 ポリドールレコード 47・9

仲井幸二郎 (郷土芸能研究室) 研究員(非)

- ①日本民謡辞典(共著) 東京堂出版 47・9

V 研究活動及び事業

②芸謡の周辺Ⅱ	「芸能」14-4	47・4
②季節と芸能	「国文学解釈と鑑賞」475号	47・12
②信州大神楽台本集（共同執筆）	芸能の科学4	48・3
③小寺融吉著「日本民謡辞典」書評	「芸能」15-1	48・1
④芸謡の位置	慶応義塾大学国文学研究会	47・12
⑤出雲神楽	慶応義塾女子高等学校	47・5

E 科学研究題目

(IV予算2科学研究費補助金交付決定額の項参照)

(3) 保存科学部

文化財の材質・構造・技法の科学的研究、並びに文化財のおかれている保存環境の科学的研究を行ない、これを基盤として文化財の保存と修復に関する技術的研究をしている。換言すれば、文化財の自然科学的研究、文化財を資料とする科学技術史的研究、文化財の保存と修理のための科学技術の応用研究の三方面がある。

研究組織としては、化学研究室・物理研究室・生物研究室・修理技術研究室の4研究室からなっている。

化学研究室

文化財及びその保存に関する化学的及び分析的調査研究並びにその結果の公表に関する業務をつかさどると規定されている。即ち文化財を構成している各種素材の同定・分析から老化・崩壊過程の究明とその防止の化学的研究である。分析には微量分析及び非破壊分析を主として行っており、老化防止・強化・接着等には合成樹脂等の応用開発に主力を注いでおり、又空気汚染の文化財への影響或は黴・細菌および虫害防除のための燻蒸剤をはじめ薬剤の適否、燻蒸後の薬剤廃棄等についての研究を行なっている。

物理研究室

文化財及びその保存に関する物理的調査研究並びにその公表に関する業務をつかさどると規定されている。文化財自身の構造・強弱・安定等研究のため、力学的試験を

行ない或はX線写真・γ線写真等の特殊撮影を応用している。又、文化財の保存環境に関し、採光・照明・温湿度等の文化財に及ぼす影響とその防止の研究を行ない、例えば美術品の展示、収蔵や梱包輸送に関し適正条件の設定と調節技術を開発する一方、新施設使用の際の必要処置の研究などを行なっている。

生物研究室

文化財及びその保存に関する生物学的調査研究並びにその結果の公表に関する業務をつかさどると規定されている。文化財に使用され又随伴している動植物的材質の判定を行なうとともに黴・細菌・昆虫等による文化財の被害の防除のため保存環境の改善並びに黴・細菌・昆虫等の採取・培養・同定並びに殺菌・殺虫のための薬剤と方法の開発。

修理技術研究室

文化財の修理に関する科学的・技術的調査研究及びその結果の公表に関する業務をつかさどると規定されている。多種の絵画・彫刻・工芸品は勿論・木造建造物の天井・壁に描かれた絵画、柱・梁・組物等の彩色装飾及び障壁画並びに彫刻的細部から石造建造物の修理に及ぶ極めて広範囲の内容が対象とされている。したがって、化学・物理・生物の各研究室の協力のもとに調査研究が進められる。技術的には修理文化財を、(1)版絵・彩色木工品・漆芸品、(2)紙布に描かれた絵画、(3)土器・陶磁器・金工品石造物の三種類に概ね分けることができる。調査研究は、現地へ出張する場合と、保存科学部アトリエ内に文化財を移動の上行なう場合とがある。アトリエは文化財修理の病室や治療室・手術室の役目を果たしていて、ここでは徹底した科学的調査研究と、科学的処理を以って周到な修理が可能である。同時に過去の技術の解明と伝統技術の検討がなされる。

A 研究・調査活動の概要

特別研究「書院造等障壁画保存の科学的調査研究」は昭和47年度で3年計画の第2年目を行なった。前年度に引き続き、京都における数ヶ所の長期観測により、書院造建築内における保存環境に関しての傾向が段々と明らかとなってきた。一方実験室的な攻究も或面では成果が得られつつあるが、材質劣化など長時間の試験を要する

ものについては、今後に期さねばならぬ課題も残っている。

受託研究は加曾利貝塚、中田横穴、観音山古墳出土品、新潟県会旧議事堂中心飾、蕪村筆蘇鉄屏風、白山媛神社船絵馬、日光東照宮陽明門唐油画の7件を受けた。これらは別項受託研究の部において各個の説明をするが、これまで修理修復処置に関する研究が主であったのが、一部保存問題が依託されるようになったのが本年度の特徴というべきであろう。受託により研究中、観音山出土品保存処置では環頭大刀の鞘尻と鯉口に貴重な銀象嵌があることを発見、陽明門では現羽目下にかくされた宝歴の唐油画の全構図が明らかになったなど話題を提供する結果を生じた。

蛍光X線・X線回折等による非破壊的分析での材質同定、X線・γ線などの透視による内部構造・欠陥などの解明等はほぼ常套的となった研究手段は引き続き必要ある毎に利用し、個々の対象物の保存問題解決に役立てている。

この年度は大気汚染・屋内汚染についても研究をすすめた。たまたま巖島神社で公害問題がおり、その解明に当たった。

又年度始めより高松塚古墳保存の問題がおり、当部より数名の調査委員を出したが、その調査の準備や予備試験等には部全体が協力している。

以上のほかにも東博より依頼の松林山古墳出土品保存処置、文化庁の建造物虫害調査への参加など依頼研究があった。

B 研究題目

登石 健三 (保存科学部長)

(I) 新施設内での展示対策 (共)

新施設内の展示物環境状態が好転せぬうちに閉館を余儀なくされる場合、少くとも独立ケース内のみは清浄化と同時に恒湿保持が出来る。その方法を開発した。

(II) 地下侵入雨水の行動及び土地と空間の界面を通じての水分の移動

古墳内への流入水の現象、古墳壁や遺跡地表よりの水分蒸発に伴う溶解物析出の現象などを研究した。

(III) 特別研究「書院造等障壁画保存の科学的調査研究」 (共)

総括と剥離機構の力学的研究を行なった。

(IV) X線による透視研究(共)

X線 γ 線透視による内部構造解明は修理物件などに対する日常的調査手段となっているが、この年度には日光東照宮陽明門西袖現牡丹彫刻羽目下の旧羽目上にある唐油画の全構図を明かにするための透視撮影を行なった。

(V) コンクリートより発散される苛性粒子の研究

江本 義理 (化学研究室長)

(I) 文化財の材質に関する研究

非破壊的方法、微量試料による分析法の精度向上に関する研究

X線分析、赤外線分析、熱分析などによる文化財の広範囲の材質の判定、変質、劣化および技法の研究。

紀年銘、年代、産地の標準資料の材質に関する分析アーターの蓄積。

(II) 考古遺物、遺跡に関する考古化学的研究。

遺物の古墳内や地下での埋蔵環境と埋蔵時(土壌、地下水など)出土後(空气中)の変質との関連と、変質および劣化の機構や過程をさび、析出物から究明する。

(III) 空気汚染等保存環境の文化財に及ぼす影響に関する研究(共)

ガスクロマトグラフィー、アルカリ氫紙法などによる汚染因子、汚染度の測定、金属試片の大气腐食度による影響の判定と汚染因子の防除法、並びに保存環境および被害調査。

(IV) 特別研究—書院造等障壁画保存の科学的調査研究

樋口 清治 (主任研究官)

(I) 木造文化財修理における合成樹脂の利用に関する研究

腐朽、虫蝕で損壊した木製品をプリポリマーの含浸で強化する方法や、マイクロバルーンを充填剤とした可塑性人工木材の研究、FRP補強処置の研究。

(II) 出土遺物保存処置の研究

出土木製品、出土金属製品などの保存および修復方法に関する研究。

- (III) 日本画の汚染クリーニングの研究 (共)
油性マジックインキの汚染除去の研究。
- (IV) 放射線照射で劣化させた絹、紙を試料とする保存処置に関する研究
補修用の新しい画絹、紙に電子線を照射し表具の補修に利用する研究。
- (V) 漆喰レリーフの保存処置の研究 (共)
漆喰のクリーニングおよび強化、補強。
- (VI) 障壁画の保存に関する研究 (共) 特別研究
障壁画の剥離、剥落の原因および過去になされた合成樹脂による剥落どめの影響に関する研究。

門倉 武夫 (化学研究室)

- (I) 文化財の保存環境に関する研究
空気汚染が文化財に及ぼす影響を究明するため、各地の博物館、社寺院等の文化財環境中のイオウ酸化物、窒素酸化物、じんあい、自動車排気物、炭酸ガスなどを測定し、汚染の挙動、経年変化及び影響因子の防除対策について研究する。
- (II) 特別研究「書院造等障壁画保存の科学的研究」
書院造建造物内外の環境について (空気汚染分担)。
- (III) 古墳の保存環境に関する研究
古墳内部環境空気中の汚染因子の究明及び防除法の研究。
- (IV) 文化財の材質に関するCHN元素分析計、ガスクロマトグラフィー等の応用
- (V) 文化財くん蒸後の残留薬剤の廃棄法について

見城 敏子 (物理研究室)

- (I) 漆塗膜の硬化、劣化過程と古代漆との関連の研究
特殊な方法で赤外線吸収スペクトルを測定し研究する。
- (II) 漆塗膜、紙、繊維、顔料の光劣化の研究
200~700m μ の波長領域の単色光を照射して変色を知り、その保存対策を研究する。

〔Ⅲ〕 木材からの揮発成分の美術品におよぼす影響とその対策

特殊装置を用いて空中に拡散している揮発成分を吸引し、紫外吸収を測定し、且つこの揮発成分と平衡に金属を放置し、溶剤抽出前後における金属面の状態を顕微鏡観察する。

〔Ⅳ〕 唐油画技法の研究

〔Ⅴ〕 特別研究「書院造等障壁画保存の科学的調査研究」(共)

膠の劣化の調査研究を分担。

石川 陸郎 (物理研究室)

〔Ⅰ〕 青銅美術品の製作技法に関する研究

鑄造時における金属の組織および加工性を知り製作技法を探究する。

〔Ⅱ〕 遺跡保存に関する研究

遺構表面、貝塚断面などの崩壊防止のための温湿度調節による研究。

〔Ⅲ〕 X線 γ 線による文化財内部構造、欠陥等の透視研究

〔Ⅳ〕 特別研究「書院造等障壁画保存の科学的調査研究」環境部門一部分担

新井 英夫 (生物研究室)

〔Ⅰ〕 文化財生物劣化の微生物学的研究

文化財の生物劣化を微生物学的観点から研究する。すなわち、各種材質の劣化要因となっている微生物の分離ならびにこれら微生物の生育条件に関する基礎的研究をおこなう。

〔Ⅱ〕 文化財の生物劣化防除に関する研究

わが国においては、微生物・昆虫による文化財の生物劣化が著しい。これらの生物による劣化の防除を目的とし、各種薬剤の殺菌・殺虫効果について研究する。

岩崎 友吉 (修理技術研究室長)

〔Ⅰ〕 出土木製品の保存に関する研究 (共)

〔Ⅱ〕 出土金属製品の保存に関する研究 (共)

- (III) 遺跡遺構の保存に関する研究 (共)
- (IV) 文化財の汚染除去に関する研究 (共)
- (V) 日本画の保存修復に関する研究
- (VI) 壁画の保存修復に関する研究
- (VII) 和紙の保存に関する研究
- (VIII) 絵画資材の研究
- (IX) 古代ガラスの研究
- (X) 文化財保存に関する内外の術語集成
- (XI) 文化財の科学的保存技術の国際基準に関する研究
- (XII) 障壁画の保存に関する研究 (共) 特別研究

中里 寿克 (修理技術研究室)

- (I) 文化財の伝統的技法の調査および記録作製
文化財の修復と保存の前提となる技法と施工工程を究明し体系化する。材質および破損原因の究明も行なう。
- (II) 平安鎌倉時代漆芸技法の実証的研究
主に平安鎌倉時代の漆芸品についてX線、実体顕微鏡を用い材質、構造、施工法の調査研究を行なう。
- (III) 日本古代漆芸品の技法的研究
縄文、弥生、古墳時代の漆芸品について材質、技法、施工工程を研究する。
- (IV) 障壁画の技法に関する研究 (共)
特別研究「書院造等障壁画保存の科学的調査研究」の一部を分担し、絵画の技法、襖の製法について調査する。

茂木 曙 (修理技術研究室)

- (I) 文化財の科学的保存技術の実施研究
建造物及び美術工芸関係の彩色等の合成樹脂による保存のための技術的研究
- (II) 受託研究による文化財の科学的保存技術の実施研究。
- (III) 特別研究「書院造等障壁画保存の科学的調査研究」

担当部門は合成樹脂等による絵画の剥落どめと、その経年変化、剥落の現状調査と既往処置の結果。

C 研究・調査活動（昭47・4～昭48・3）

登石 健三（保存科学部長）

高松塚古墳の発見後直ちに応急保存対策調査会が組織されたが、その時点よりこれに参加し、4月・10月の現地調査のほか、年度内に行なわれた6回の調査会議、更にその後数回の保存対策調査会に出席した。

福島県いわき市の中田横穴の保存状態調査研究、千葉市加曽利貝塚遺跡の保存は何れも受託研究となったが、共に地下空間や地表に関する研究が必要で、新しい研究面として興味ある対象となった。

新施設の準備或は発足に関連しては、熊本県立博物館、京都市立美術館、鳥取県立博物館、栃木県立美術館、奈良国立博物館等に趣き、設備計画に参加或は館内の保存環境の調査を行なった。

文化庁後援などの展覧会に対しては会場の保存環境改善や輸送中の湿度安定に協力した。西洋美術館におけるデューラー展のほか大観展、三十三間堂展、密教美術展、神護寺展、親鸞展などである。

日光東照宮陽明門西袖のかくれた唐油画についてのX線透視は前年度の研究の継続ともいうべきもので、年度始め早々に行なった。

年度末には韓国研修員の研修旅行に同行し、四国の製紙状態、臼杵石仏の保存状態などを調査した。

江本 義理（化学研究室長）

考古化学および材質調査—高松塚古墳壁画に関し、応急保存対策委員会、総合学術調査会に参加し、石室内外の温湿度・炭酸ガス・酸素濃度の測定、微生物の採取、壁画の状態の変化の観察、漆喰・彩色顔料・析出物の分析および顕微鏡写真の撮影等の基本的データの収集につとめ、入室調査時の温湿度調整、炭酸ガス除去、防霉処置などを行なった。（47・4，9～10）熊本・チブサン古墳保存対策委員会の現地調査

等に参加(47・8)福島・中田横穴保存に関し、古墳内の壁面の状況、彩色顔料の分析、顕微鏡撮影を行なった。(47・12, 48・2)千葉・加曾利貝塚に於いて、加湿実験コーナーの析出物などについて調査を継続(48・1, 3)(受託研究)

群馬・観音山古墳出土金属器の保存に関し青銅器、鉄器の材質調査およびさびの分析を行ない、保存処置の参考に供した(47・7, 12)(受託研究)平城宮跡バイパス工事調査時に発掘された古銭につき、時代別の成分変化を究明するため、奈良国立文化財研究所に協力して、X線分析を行なった。(48・1～3)

空気汚染の影響調査—宮内庁の依頼により、京都・安楽寿院南陵多宝塔内、天蓋環珞のガラス玉の風化状況(47・4)を、広島・厳島神社に於ける丹塗料の変色を現地調査(47・11)し、それぞれ試料採取と汚染調査用試片を設置し、汚染の影響の検討を開始した。

樋口 清治 (主任研究官)

昭和47年4月所長に随行して大韓民国に出張した。海印寺大藏経版木、仏国寺釈迦塔内発見遺物などの保存科学的調査をし、またソウル、慶州などの各地の文化財・遺跡の保存状態を調査した。

群馬県観音山古墳出土の金属製品37点を、受託研究として保存処置を実施した。処置内容は錆とり、樹脂減圧含浸、考古学上の修復であるが、今回は特に塩化銅を含む緑青の除去や、銀表面の塩化銀の除去などに新しい知見を得た。また処置中に鉄錆に埋没していた銀象嵌を偶然に発見し、その再現にエアブラッシュが非常に有効であることがわかった。

重要文化財新潟県旧県会議事堂の漆喰製天井飾り三箇の保存処置を受託研究としておこなった。漆喰表面の汚れの除去に、特殊な泡状洗剤を工夫し、更に黄色汚染は脱脂綿を表面に水張りし、乾燥に伴って表面に吸い上がる毛细管現象を利用することで、地肌を傷めずクリーニングすることができた。強化にはエポキシ樹脂のFRPを裏面に裏打した。

京都国立博物館蔵重要文化財多宝千仏石幢の室内搬入に伴ない、エチルシリケート塗布含浸による強化処置を指導した。

受託研究による日本画のマジックインキ汚染除去に関し、溶剤溶出法の効果および

選定につき実験，研究して一応の見通しを得た。

福島県喜多方市重要文化財熊野神社長床修理に伴い，現地に出張して合成樹脂による保存処置方法を指導した。

特別研究費により京都市二条城，南禅寺，天球院の剥落どめ処置後の経時変化を調査した。

門倉 武夫 (化学研究室)

前年度に引続き，文化財環境に於ける空気汚染度の経年変化を知るため，上野公園を始め徳勝寺(大垣市)，高德院(鎌倉市)，三渓園(横浜市)，47年11月より厳島神社(広島県)，桃山陵墓(京都市)を加えてイオウ酸化物，窒素酸化物を測定，続行中。又，保存科学部屋上，実験室，収蔵庫等内外の浮遊ふんじんを測定し，その挙動を検討した。

特別研究に関して前年度の二条城，智積院，妙蓮寺に南禅寺，天球院，西本願寺を加え，5寺院10ヶ所でイオウ酸化物，窒素酸化物の経年変化を測定，継続中。又，夏期(47・7)及び冬期(48・2)に，これらの寺院の内外でじんあい，炭化水素の挙動を調査した。

受託研究により中田横穴古墳の科学的調査のため古墳内部環境空気中のじんあい，炭化水素，炭酸ガスなどを測定し，入室による内部空気の汚染状況を調査した。47・12，48・2。

是川遺跡(新潟県)出土有機物質のCHN元素分析を行なった。13例。

文化財くん蒸後の残留薬品の廃棄法についてメチルブロマイド，酸化エチレン，弗化スルフリル等のくん蒸剤の分解，吸着などによる除去法を実験，基礎的資料を得た。

見城 敏子 (物理研究室)

京都市立美術館収蔵庫，森の美術館，栃木県立美術館，九州歴史資料館等新設の美術館の収蔵庫，展示室の保存環境の調査および指導ならびにその応用研究を試みた。また文化庁後援などの特別展で文化財等の一時的展観をする場合の好適保存環境の調整を指導し，且つ実地に遭遇した諸問題の解決方法を実験室的に検討し，文化財等の保存環境に関する基礎研究を積み重ねている。

石川 陸郎 (物理研究室)

特別研究の一環として京都二条城、南禅寺において年間を通して温湿度記録を行なっている。受託研究として加曾利貝塚の保存環境について湿度調節を行ないながら貝層断面の保護にあたっている。日光陽明門西側壁現牡丹透彫下の彩色油彩画のX線透視を行ない全構図を明らかにした。

新井 英夫 (生物研究室)

伊勢神宮文庫の虫害が著しいので、2回にわたる調査の後、メチルブロマイドによる書庫の密閉燻蒸を実施した。(47・5)

文化庁建造物課は、昭和46年度から3年計画で、蟻害緊急調査を実施している。今年度千葉県県の依頼で、県下に所在する重要文化財建造物16棟について、シロアリ、キクイムシ・木材腐朽菌による被害を調査し、その防除対策も含めて、調査結果を保存科学11号に報告した。(47・6～10)

新燻蒸剤バイケン(弗化スルフルル)は、材質に対する影響が少ないといわれているので、従来の燻蒸剤と殺菌・殺虫効果ならびに材質に対する影響について比較研究である。特に、微生物の殺菌効果を分担実施中である。(47・7～)

中田横穴保存状態調査に参加した。(47・12)

特別研究(障壁画)では、定点を定めて季節による微生物数の変動を測定中である。(48・2)

岩崎 友吉 (修理技術研究室長)

高松塚古墳の保存

2回にわたる開封に立合い主として壁画を中心に保存環境の調査、調整に協力し、壁画の構造および制作過程の考案を行ない部分的に補強処置をも行なった。

一方これに近似した性質を持つ外国の壁画の保存に関する国際的情報の収集に努め法存の根本方針の確立を期した。

本年度はこの古墳の保存作業のためにかなりの時間をあてた。

窯址保存処置指導

白山姫神社船絵馬保存処置（受託研）

マジックインキによる汚染のクリーニングに関する調査（受託研）

合成樹脂の放射線重合の文化財への応用の検討

障壁画の保存の研究（特研）

防黴剤，燻蒸剤等の適性の検討

各種マイクロバルーンの適性の比較的研究

研究会「古文化財研究への原子核科学的方法の応用」出席（京大原子炉実験所）

絵画資材についての講義（東京芸大）

海外からの留学生の指導

タイ人1名（保存全般）

韓国人2名（紙その他）

日本人（メキシコ在住）（保存修復全般）

ローマセンター理事会出席（ローマ） 72・4

ユネスコ地方センター会議出席（ローマ） 72・4

アジア太平洋地域博物館会議出席（東京） 72・11

壁画保存の調査のための海外出張（イタリア，フランス） 73・1
～2

中里 寿克（修理技術研究室）

平安鎌倉漆芸品の調査

唐草文錫平文経箱（東博蔵），蝶蒔絵鏡箱（東博蔵）を調査し，稲荷山経塚出土の砂金（東博蔵）についても蒔絵粉との関連において調査した。又法隆寺献納宝物の瑠鉢について再調査し，修復施工法について助言を行ない唐花文螺鈿礼盤，蓮花散蒔絵経箱（熱海美術館蔵），雷文螺鈿鞍（主水神社蔵）についても調査を行なった。

受託研究

受託研究による観音山古墳出土品の保存処置に関連し，塗漆製品と金工品について，それぞれ技法的調査を行なった。

又，新潟県田県会議事堂中心飾りの洗滌処置及修復処置を行なった。

特別研究

京都の二条城，南禅寺，天球院，西本願寺の障壁画の技法及顔料剥落状態について調査した。

その他

青砥における高速道路建設にともなう発掘により出土した漆碗五点について調査。
文化庁無形文化課製作の映画「人間のわざー松田権六」の企画に参加。

茂木 曜 (修理技術研究室)

埼玉県西武ユネスコ村所在の重要文化財勅額門、御成門、丁字門の三棟建造物の彩色の一部に対し合成樹脂を使用し剥落どめを実施した。

国宝東福寺三門(京都)の解体が終わり、建築部材のうち、彩色のある部分の保存処置について、現地調査を行なった。

新潟県寺泊町の白山媛神社船絵馬52点(国指定重要民俗資料)の科学的保存処置を行なった。

特別研究の担当部門に当たる書院造り等障壁画の合成樹脂等による剥落どめと、その経年変化、剥落の現状等の資料収集を行なった。

D 主要研究業績 (①:著書 ②:論文 ③:解説
④:研究発表⑤:講演・放送⑥:その他)
昭47・4~昭48・3

登石 健三 (保存科学部長)

②The Fine Arts Museum at Expo '70, Osaka.

Conservation techniques. (共著) Museum (UNESCO) XXIV 47

②国宝如庵及び法隆寺旧富貴寺羅漢堂のX線による調査 (共著)

保存科学10 48・3

②傾斜地古墳内での流水に関する考察

保存科学11 48・3

②減圧滅菌機の湿度調節 (共著)

保存科学11 48・3

③美術品の展示・保管に必要な環境

設備と管理 48・2

” 48・3

⑤保存科学

昭和47年度文化財建造物修理主任技術者講習会 47・8

⑥Art and archaeology technical abstracts - 抄録報告 AATA Abstracts 47

江本 義理 (化学研究室長)

- ②古文化財の材質研究 化学教育 20-5 47・10
- ②考古遺物のX線分析 考古学と自然科学 5 48・1
- ②考古遺物の変壊生成物 保存科学11 48・3
- ②③化学者の見た高松塚古墳 物性14-1 48・1
- ④考古遺物のX線分析
- 「古文化財への原子核科学的方法の応用」京大原子炉実験所短期研究会 47・9
- ④金属製文化財の材質と腐食 文化財保存科学研究協議会 47・9
- ⑥高松塚の保存 P. O. Box 自然 No.322 48・1

樋口 清治 (主任研究官)

- ②木造建造物化粧部材の保存と修復における合成樹脂の応用 保存科学10 48・3
- ②国宝如庵移築に伴う部材保存処置 (共著) 保存科学10 48・3
- ④合成樹脂による鉄製品の保存処置 文化財保存科学研究協議会 47・9
- ④素材の化学的補修技術 昭和47年度文化財建造物修理主任技術者講習会 47・8

門倉 武夫 (化学研究室)

- ②公害による文化財の被害調査 保存科学11 48・3

見城 敏子 (物理研究室)

- ②漆中の擬和物の簡易試験法 保存科学11 48・3
- ②油絵の保存について、第1報 (アマニ油の硬化過程および塗膜に及ぼす雰囲気湿度と紫外線の影響) 保存科学11 48・3
- ⑥京都市美術館新築収蔵庫内保存環境の調査報告書 47・12

石川 陸郎 (物理研究室)

- ②新薬師寺招柱羅大菩薩のX線による調査 美術研究 281 47・10
- ②国宝如庵および法隆寺旧富貴寺羅漢堂のX線による調査 保存科学10 48・3
- ④青銅製品のX線透視 文化財保存科学研究協議会 47・9

新井 英夫 (生物研究室)

- ②減圧滅菌機の湿度調節 (共著) 保存科学11 48・3
- ②国宝・重要文化財建造物の蟻害緊急調査—千葉県蟻害調査を中心にして— (共著)
保存科学11 48・3
- ②発掘後の古墳保存の現状と将来 考古学雑誌48巻3号 48・3
- ④本邦命名アスペルギルス属のタイプに関する研究 日本農芸化学会大会 47・
- ④中等生物教育における微生物 第28回日本細菌学会関東支部大会 47・10
- ⑤木材の生物劣化とその防除
昭和47年度文化財建造物修理主任技術者講習会 47・8
- ⑤美術工芸品の生物劣化とその防除—木材と紙類を中心に—
第17回修理技術者(美術工芸品)講習会 47・10

岩崎 友吉 (修理技術研究室長)

- ②高松塚古墳の保存 朝日新聞 47・9
- ②高松塚保存について 化学教育 47・10
- ②文化財保存に於ける人工木材の応用 保存科学10 48・3
- ⑤古墳 NHK 47・4
- ⑤明日香壁画と日本人(座談会) 文化放送 47・4
- ⑤古色再現 NHK 47・7
- ⑤史料の保存科学 国立史料館 47・10
- ⑤木の寿命 東文研開所20周年記念講演 47・12
- ⑥まのあたり見る飛鳥人 日本経済新聞社座談会 47・4

中里 寿克 (修理技術研究室)

- ②旧富貴寺羅漢堂遺材の科学的処置 保存科学10 48・3
- ②国宝如庵移築に伴う部材保存処置(共) 保存科学10 48・3
- ②中尊寺金色堂漆芸部材の修復(上) 保存科学11 48・3

茂木 曙 (修理技術研究室)

- ②重要文化財旧富貴寺羅漢堂の保存処置に関する計画・算定 保存科学10 48・3
②出羽三山神社合祭殿内板戸彩色保存処置 保存科学11 48・3

E 科学研究費題目

(本年度科学研究費補助金交付なし)

F 受託研究

(I) 加曾利貝塚遺跡保存

前年度に引き続き地表よりの蒸発、これに伴う無機塩の析出を止める研究を行なった。空気湿度を上げて蒸発をおさえることが析出防止の上では有効と考えられるが、一方で微生物発生の好条件を作る。更に防黴剤の使い方とか温度制御などに工夫を要するので、もう一ケ年受託研究の延長を計った。

(II) 中田横穴保存状態調査研究

この古墳は発見されるとすぐに大気曝露をさける手段がとられ、現在は硝子二重隔壁で入口を閉じてある。このことにより古墳保存の基本法則を引き出すための絶好の研究対象を与えると考えられる。内部環境の調査、その推移に伴う壁面の変化研究、壁画材料も合わせ壁面物質の分析的研究などを行なった。

(III) 観音山古墳出土品保存処置に関する研究

馬具大刀等38点の金属製品の保存処置を行なった。材質は鉄、青銅、金、銀で特に鉄製品は著しく錆びていた。錆とり後アクリルエマルジョンMV1の減圧含浸により強化、考古学的見地より整形・修復を行なった。大刀の一部の鉄錆中に埋没した銀象嵌を偶然発見、X線写真で竜文であることを確認した。

(IV) 重要文化財新潟県会旧議事堂中心飾り3箇の保存処置研究

漆喰製レリーフで表面が真黒に汚れ、著しく損傷していた。保存科学部アトリエに搬入し処置した。泡状洗剤を特別に工夫して使用、表面には濡れた脱脂綿を貼りつけて、乾燥の際黄色汚物を綿の方へ吸い上げる方法をとった。

V 研究活動及び事業

裏面よりエポキシ樹脂のFRPで補強、欠損部はガラスマイクロバルーン、水酸化カルシウム、アクリルエマルジョン等の混合物で補足整形した。

(V) 重要文化財与謝蕪村筆蘇鉄図屏風修理方法研究

紙本墨画四曲屏風一双で、マジックインキ様のもので加筆汚染され図柄が著しく損われているものである。汚染除去の基礎研究を行なった。マジックインキの種類、構成、判別法を調査、油性マジックインキの溶剤溶出について実験研究、20種類の溶剤中から2～3の溶剤を選出した。一度溶出したインキが余白部に再染着することもあり、紙の質と関連して猶多少の問題を残している。

(VI) 新潟県寺泊町白山媛神社船絵馬保存処置

安永3年以降52点の船絵馬の保存処置で、当部アトリエに搬入して行なった。板直接に描かれたものは少く、大ていは多少の紙下地を置いて描かれていた。紙の接着にはプライマルAC 34を、顔料にはP. V. A. の溶液を用いた。

(VII) 東照宮陽明門西袖壁内唐油画のX線透視撮影

昨年度の受託研究により西袖羽目下にも旧羽目がかくされ、鶴に松の構図であることが部分的に分かっている。文献によれば宝歴唐油画は大和松岩笹に果籠の鶴であるが、その全構図を知るべく、西袖壁全面に亘ってX線透視撮影を行なった。現牡丹彫刻羽目と一緒にフィルム上に写るが、これを差引いて全構図を描く作業は日光社寺文化財保存会にて行なわれた。

2 事業

(1) 出版

A 美術研究

昭和7年1月創刊、昭和47年3月第280号を発行。当研究所美術部の調査研究の成果を公表するための機関誌。主として所属研究員の執筆にかかる論文・研究資料・図版解説・美術関係文献の校刊等を掲載し、ときに所外研究者の寄稿を受けることもある。A4版各号本文42頁、原色図版1、単色図版8、各年度6冊刊行。

昭和47年度(第281号～第286号)「美術研究」所載の論文等の題目は次のとおり

である。

美術研究281号 昭和47年5月

<論文>

新薬師寺の十二神将像について 久野 健

附載 新薬師寺招杜羅大将像のX線写真による調査 石川 陸郎

<研究資料>

西行物語絵巻 詞書公刊 宮 次 男

美術研究282号 昭和47年7月

<論文>

立本寺蔵妙法蓮華経金字宝塔曼陀羅について 宮 次 男

<図版解説>

石川孟高筆「少女愛猫図」の原画「ミス・トリンマー」 坂 本 満

<研究資料>

吉田忠氏蔵古写本『こわたの時雨』公刊 上 田 村 悦 子

美術研究283号 昭和47年9月

<論文>

『芥子園画伝』について 一その成立と江戸画壇への影響一 鶴 田 武 良

平安初期における如来像の展開 中 久 野 健

<図版解説>

慈尊院弥勒仏像の台座蓮弁の裝飾文様 秋 山 光 和 孝
柳 沢

美術研究284号 昭和47年11月

<論文>

安宅切料紙下絵の特殊性 一平安世俗山水画と経絵の一接点一 江 上 綏

平安初期における如来像の展開 下 久 野 健

美術研究285号 昭和48年1月

<論文>

日野原家本大仏頂受茶羅について 柳 沢 孝

<研究資料>

新出のキリシタン関係銅版画 菅 野 陽

美術研究286号 昭和48年3月

〈論文〉

- | | |
|---------------------------|------|
| 吉川家伝来 山道草花鶴亀文緋箔胴服について | 田実栄子 |
| 芳崖の写生帳 上 - 「奈良官遊地取」について - | 関千代 |
| 敦煌本幡画伝図考 (下) | 上野アキ |

B 日本美術年鑑

昭和11年10月創刊，毎年1冊（ただし昭和19年～21年版および昭和22年～26年版は各1冊）出版し，昭和48年3月昭和47年版を刊行した。内容は，毎年1月から12月までのわが国美術界の活動・情勢を記録するもので，美術界年史・展覧会・物故者略歴・雑誌単行図書美術文献目録等を収録している。所内研究員の調査，執筆による。

C 扇面法華経

本書は現存する扇面法華経冊子のすべてを網羅した原色図版（65葉，うち原寸2葉）と研究篇（A3判，255頁，図版32）とからなる大冊の図鑑兼研究書である。この扇面法華経の研究は昭和40年度文部省科学研究費による総合研究（代表者高田修氏）の一部として行われたもので，以来数度にわたる実証的な調査と研究を重ね，美術部の秋山光和，柳沢孝の2名に鈴木敬三氏（国学院大学教授）の協力を得て，漸く上梓の運びとなり，当研究所の監修として鹿島出版会から5月に刊行された。原色写真は美術部市川和正の撮影にかかる。研究篇では序章扇面法華経の現状（秋山・柳沢），第1章扇面法華経の絵画（秋山），第2章扇面法華経冊子の風俗（鈴木），第3章扇面法華経冊子の成立をめぐる諸問題（柳沢）にわたって考察し，図版解説（共同執筆）のほか，各帖一覧と文献目録とを収め，なお口絵には特殊写真（拡大，カラー顕微鏡，X線など）などの図版を掲げた。

D 芸能の科学 4 - 芸能資料集Ⅲ 昭和48年3月

信州大神楽台本集

三隅治雄・仲井幸二郎・中村茂子

江戸三座紋番付所在一覧

浦山政雄

能の現行小書

横道万里雄・松本雍

E 保存科学

保存科学 第10号 昭和48年3月

重要文化財旧富貴寺羅漢堂と国宝如庵の木質部材保存修復に

- おける合成樹脂応用の開発・・・・・・・・・・関野 克
文化財保存に於ける人工木材の応用・・・・・・・・・・岩崎 友吉
重要文化財旧富貴寺羅漢堂の保存処置に関する計画・算定・・・・茂木 曙
国宝如庵及び法隆寺旧富貴寺羅漢堂のX線による調査・・・・石川陸郎・登石健三
木造建造物化粧部材の保存と修復における合成樹脂の応用・・・・樋口清治
旧富貴寺羅漢堂遺材の科学保存処置・・・・・・・・・・中里寿克
国宝如庵移築に伴う部材保存処置・・・・・・・・・・中里寿克・樋口清治
New Application of Synthetic Resins for the Conservation

and Restoration of Wooden Parts in Structures. . . . Masaru SEKINO

保存科学 第11号 昭和48年3月

- 出土遺物の変壊生成物について 江本 義理
傾斜地古墳内での流水に関する考察 登石 健三
減圧滅菌機の湿度調節 新井英夫・登石健三
油絵の保存について（第1報） 見城 敏子
（アマニ油および塗膜の温湿度，紫外線照射の雰囲気の影響）
中尊寺金色堂漆芸部材の修理（上） 中里 寿克
国宝・重要文化財建造物の蟻害緊急調査 - 千葉県蟻害調査を中心として -
森八郎・新井英夫・町田和江・小川智儀・鳥塚幸蔵・富松恒博
公害による文化財の被害調査 門倉 武夫
出羽三山神社合祭殿内杉戸彩色保存処置 茂木 曙
漆中の擬和物の簡易試験法（速報） 見城 敏子

F その他の出版物

美術部

- 支那古版画図録 (美術研究資料第1輯) 昭和7
吉備大臣入唐絵詞 (同 第2輯) 同 9

V 研究活動及び事業

徽宗摹張萱搗練図	(美術研究資料第3輯)	同	10
鳳凰堂雲中供養仏	(同 第4輯)	同	11
桃山時代金碧障壁画	(同 第5輯)	同	12
富貴寺壁画	(同 第6輯)	同	13
印度及南部アジア美術資料	(同 第7輯)	同	14
光悦色紙帖	(同 第8輯)	同	14
菱田春草	(同 第9輯)	同	15
能恵法師絵詞	(同 第10輯)	昭和	16
宮素然筆明妃出塞図卷	(同 第11輯)	同	16
日本美術資料	第1輯	同	13
同	第2輯	同	14
同	第3輯	同	15
同	第4輯	同	16
同	第5輯	同	17
近代日本美術資料	第1輯	同	23
同	第2輯	同	24
同	第3輯	同	26
墨跡資料集	第1輯	同	24
同	第2輯	同	24
同	第3輯	同	26
源氏物語絵巻		同	24
黒田清輝素描集		同	24
栄山寺八角堂		同	25
栄山寺八角堂の研究		同	26
法隆寺金堂建築及び壁画の文様研究		同	28
黒田清輝作品集		同	29
東洋美術文献目録	明治以降昭和10年まで	同	16
同	続編 昭和11年～同20年	同	23
東洋古美術文献目録	昭和21年～同25年	同	29

美術研究索引	第1号～第100号	同	16
美術研究総目録	第1号～第230号	同	40
高雄曼荼羅		同	41
東洋美術文献目録	明治以降昭和10年まで(再刊)	同	42
日本東洋古美術文献目録	昭和11年～同40年	同	44

ほかに科学研究費補助金(研究成果刊行費)の交付を受け、または本研究所の監修で刊行された図書は次のとおりである。

光学的方法による古美術品の研究

東京国立文化財研究所光学研究班編	吉川弘文館	昭和	30
梁楷	美術研究所編 便利堂	同	32
醍醐寺五重塔の壁画	高田 修編 吉川弘文館	同	34
平安時代世俗画の研究	秋山光和著 同	同	39
近代日本美術の研究	隅元謙次郎著 大蔵省印刷局	同	39
黒田清輝	同 日本経済新聞社	同	41

芸能部

標準日本舞踊譜		昭和	35
音盤目録 I		同	40
芸能の科学1 - 芸能資料集1 - 四世鶴屋南北作者年表		同	41
芸能の科学2 - 芸能資料集2 - 鮫の神楽台本集成		同	41
音盤目録 II		同	45
東大寺二月堂 観音悔過(お水取り)			
	東京国立文化財研究所芸能部監修	ビクターレコード	同 47
芸能の科学3 - 芸能論考1			
	東京国立文化財研究所芸能部編	平凡社	同 47

保存科学部

重要文化財円成寺本堂内陣彩色剥落どめ

(東京国立文化財研究所受託研究報告 保存科学部 第1号) 昭和35

国宝明王院五重塔内部彩色剥落止本作業及び木材の科学的処置

V 研究活動及び事業

	(同 第2号)	同 36
国宝明王院五重塔四天柱塗装処置及び天井板彩色保存処置		
	(同 第3号)	同 36
国宝西明寺三重塔内部彩色剥落どめ	(同 第4号)	同 36
重要文化財東照宮内部彩色剥落どめ	(同 第5号)	同 36
国宝海住山寺五重塔内陣板絵及び彩色剥落どめ	(同 第6号)	同 37
重要文化財靈山寺三重塔内部彩色剥落どめ等科学処置	(同 第7号)	同 37
重要文化財万福寺木額、柱拵、榜牌等剥落どめ	(同 第8号)	同 38
重要文化財舟屋形内部彩色剥落どめ	(同 第9号)	同 38
国宝興福寺北円堂内部彩色保存処置	(同 第10号)	同 39
国宝崇福寺第一峰門彩色剥落どめ	(同 第11号)	同 39
重要文化財本地堂焼損材補修材料の研究	(同 第12号)	同 40
重要文化財崇福寺三門彩色剥落どめ	(同 第13号)	同 40
重要文化財般若寺十三重石塔初重軸石剥落どめ硬化処置	(同 第14号)	同 40
重要文化財吉野水分神社本殿建築彩色剥落どめ	(同 第15号)	同 40
国宝薬師寺東塔内部彩色剥落どめ	(同 第16号)	同 41
重要文化財千代神社本殿の向拜手挟の保存修理にかかる保存処置		
	(同 第17号)	同 41
木造神像二軀の科学的保存処置	(同 第18号)	同 42

(2) 公開学術講座

美術部

昭和47年10月21日(土) 13・30～16・30

於日本経済新聞社小ホール

1 カソリック改革と洋風美術

坂本 満

16世紀後半に日本に移入される新しい宗教であるキリスト教は、イエズス会という最も積極的なカトリック改革派によるものであった。この派は布教手段として芸術を重視し、17世紀のバロック芸術を育てる上でも無視できない宗教団体であるが、日本

にも東方巡察使ヴァリニャーノの指導の下に画技指導の専門聖職者が招かれて、布教の手段の充実が計られる。キリスト教の公認された活動期は1587年までで、少なくとも1614年以後は極度に厳しい迫害期に入るがこの限られた期間を中心とする洋風絵画について、その様式と主題について述べた。その様式とは16世紀後半のマニエリスム国際様式の、かなりアカデミックな傾向を保つ一種の亜流であり、主題的には宗教画の多くは失われてしまったが、現存する世俗画にはその源泉としてフランドル系版画がかなり具体的に判明していることをスライドによって説明した。

2 西欧啓蒙主義と洋風表現

陰里鉄郎

江戸後半期の洋風絵画は享和期(1801)をはさんで前後の第1、第2期、さらに弘化・嘉永(1845)以降の第3期に分けて考えることができる。第1期は江戸を中心とする作家群の活躍が目だつものに対して第2期は上方、長崎など関西以西に主要な作家作品を見出す。それらに見られる洋風表現の主題は人間、人類に関するあらゆるものについて科学的認識を志向した理性の世紀といわれる18世紀啓蒙思潮のなかに生まれた図書・図譜類の輸入書挿図・版画に求められており、その具体例を司馬江漢、石川大浪、垂欧堂田善などに見出す。第2期作家群にも同様な例はみられるが、同時に洋風技法をとりいれて伝統的素材・技法による作品が多数あり、その例をオランダ国立ライデン人類学博物館所蔵の川原慶賀の作品によって紹介した。

(3) 開所記念行事

昭和47年度 (美術・芸能・保存科学3部合同)

昭和47年12月7日(木) 17・50~20・20, 朝日講堂において東京国立文化財研究所20周年記念「木と文化財」に関する講演会を開催した。

1 木の寿命

保存科学部修理技術研究室長 岩崎友吉

植物学的にいう樹木の寿命は樹種によってまちまちであり、人生にくらべて長いものは1000年を越すものもある。しかしわれわれが木の寿命ということばから理解する範囲は、生物的生命の終わった後も木という物質が何らかのかたちで生命を保っている状態にまでおよぶ。すなわち人間が何らかのかたちで、木を用いて思い思いのものをつくった場合、こんどはそういう木製品の寿命を問題とするわけである。つきつめれ

ば形而上学的な寿命の問題にまで移行するわけであるが、ここでは一応われわれの五感で認知できる範囲に限定して、木造文化財の科学的保存の問題をとり上げる。

古来、日本には木造の文化財が多く、特に木造建築の数はおびただしい数に上り、また彫刻、工芸品の中にも木造のものは多い。

これらの寿命は、使われ方と保存環境とによって異なる。

使われ方について考えると、生きた樹木そのままの天然記念物はしばらく措くとして、何らか人為的に加工したものについていうと、構造材として木の力学的性質を利用した場合から、彫刻、工芸品のように工作性を利用して何らかの形をつくることを目的とした場合とに分けられる。民具の一部などにはこの二つの要素が同時に見られる場合も多い。また別の見方をすると、木肌の美しさを生かした作品と、木を素地として用いた場合とに分けられる。

建築、彫刻、工芸品等にはいずれにもこの両方の要素が見られる。特殊な例としては、おがくづを利用した人形の素地等も考えることができる。また紙ももとは木といえるが、ここでは触れない。

日本に板絵があり、外国にも板に描いた油絵があるが、これまたいづれも素材の美しさを強調する作品ではなく、絵具をのせる素地として木を用いたものである。

以上述べたほかにいろいろの木製文化財があるが、これらの作品素材としての木の寿命にはもちろん限度があり、いづれもやがては崩壊する運命にあることはまちがいない。その崩壊をどのようにして遅らせ、また損傷を蒙ったものを如何に補強して保存するかが文化財保存科学者の技術的使命である。それらの実例を二、三述べる。

2 樹魂と芸能

芸能部郷土芸能研究室長 三 隅 治 雄

(1) 樹魂伝説

(A) 神仏影向

神降松・オボツ松・踊松・天狗杉・棺懸桜・鉾の木・杖樟・杖松・逆藤など

(B) 祈願・奇瑞

笠松・袖取松・一鍬松・夜泣杉・子授銀杏・杖椿・女夫観・縁切榎

(C) 崇り・怪異

起松・虚冥僧桜・喰り松・杖樺・逆栗・逆椿・化柳・入房梅・夫婦柵など

D 予兆・卜占

鬼の松・矢立杉・苗代桜・種蒔桜・核割梅・鉾の木<榎>・二服薄・二股竹など

(2) 神木の条件

- (A) 形状 (巨大・直立・空洞・奇形など)
- (B) 生態 (常緑・異常盛垂・異常開花など)
- (C) 季節 (農耕とのかかわりなど)
- (D) 色 (白・赤の重視など)
- (E) 香 (薫香・異香など)
- (F) 葉種

(3) 用法

(A) 依代

松・杉・榊・松・樟・柳・桜・椿など

(B) 呪具

祝い棒・福杖・削り花・御竈木など

(C) 採り物 (芸能に関して)

松・榊・笹・竹・梅・橘・ニワトコなど

(D) かぶり物・かざし

葛・薄・クバ・棕櫚・藤・葵・躑躅など

[例示] イザイホー次第 (沖繩知念村久高)

巫女集団に初加入するナンチュの扮装の変化の経過を示す。

日	行事名	髪・髪飾	衣裳
初日	夕神遊び	垂れ髪	胴衣・下裳
二日目	頭垂れ遊び	同	同
三日目	花さし遊び 加入式	巻髪・白鉢巻をし イザイ花をさす	うふじみ 大衣 (神衣裳)
四日目	綱引・帰宅	巻髪・イザイ花 カーブイ (蔓草) 巻く	大衣

	神前への報告	上のはかにアダカ の葉をさす	手にクバ団扇 をもつ
--	--------	-------------------	---------------

3 霊木と仏像・神像

美術部第一研究室長 久野 健

日本人は古くから、こんもりと葉の繁った大樹や山上に亭々とそびえる巨木に霊性を感じ、神木として信仰する風があった。六世紀中葉に仏教が我が国に伝えられ、仏像が制作されるようになると、その最初期からそれまで「葉の木」とか「繁茂せる木」として信仰されてきたクスノキで木仏像が制作されるようになる。日本書紀の欽明14年の条には次のような話がのっている。すなわち河内の国の茅渟の海に光るものがあり、時には雷の如き音がきこえた。天皇はそれをあやしみ、溝辺直に海中をさがさせたところ、それは樟であった。そこで、これは神聖な木に違いないと考え、仏像二軀を造らせたという。この一軀が比蘇寺の本尊像であるという。これは、比蘇寺木尊の靈験説話であるが、現在残る七世紀の木彫は、法隆寺の夢殿観音像をはじめ、百済観音像にしても六観音像にしても、また中宮寺の半珈思惟像にしてもいずれもクスノキが彫刻材として使われていることは興味深い。広隆寺の宝冠弥勒像だけが例外でアカマツが使われている点、この像を朝鮮伝来の仏像とする寺伝も一部の真を伝えているかに見える。

八世紀に入っても長谷寺の本尊像は崇りをする木を彫刻して制作した仏像と伝えられ、日本霊異記には、半作の木像が橋に使われ、人に踏まれるたびに「ああ痛くふむことなかれ」と声を出した話などを伝えている。平安初期以後は、日本の仏像彫刻の主流は木彫刻像になるが、そのごく初期のものは、木のもつ量感と木肌の美を生かして制作された仏像が多い。神護寺の葉師如来や新葉師寺の葉師如来像などがそれである。また材としてはヒノキが主流であるが、中には雷が落ちて内部の空洞となった巨木を神に感応した木として尊び、これを使って仏像や神像を造った例もある。また平安時代になると、木彫仏を制作する時には必ず、御衣木加持とよぶ荘重な儀式が行なわれたことも、日本人の木に対する感情を示している。また山上にそびえる巨木を立木のままノミを入れ仏像を造った立木仏も遺品も全国に例がみられる。広島県福王寺の不動明王像や長野県智識寺の十一面観音像、茨城県西光院の十一面観音像等がそれである。この立木仏の伝統は、脈々と近世にまで続き、円空や木喰明満等の遊行僧も

立木仏を制作している点は、古代の立木仏の制作者を考える上に一つの暗示を与えるものであろう。

(4) 国際国内関係

美術部

国際関係としては、美術部の出版物、研究資料など各国との交換が盛んに行われ、また、外国の研究者で当研究所の研究員の指導をうけ、資料を利用して研究する者も多かった。海外出張による調査研究については、陰里鉄郎第二研究室員が近世・近代日本洋風美術と西洋美術との関係について調査研究のため、文部省在外研究員として46年10月より47年8月まで西欧八カ国に出張し、とくに、オランダ・ライデン大学図書館において川原慶賀など多数の江戸時代洋風画家の作品・資料を調査し帰国した。

国内における活動については前記各項に記されている如くであるが、学会関係として特に美術史学会、美学会などと接触を密にし、多くの寄与をなした。

芸能部

国際関係としては、各国大学・図書館などより、芸能部の出版物との交換依頼を受けている。また、外国の研究者で芸能部員の指導をうけ、施設・資料を利用して研究する者も現われた。海外における調査研究活動については、横道万里雄音楽舞踊研究室長が、デンマーク、ホルステブロー市における日本演劇セミナーでの講義、イタリア、ベネチア市における演劇セミオティカに関するシンポジウムへの参加、ユーゴスラビア、ベオグラード市における世界演劇祭能楽公演に際しての講演とテレビ解説、パチカン市の聖ピエトロ寺院における諸行事の調査などのため、47年9月より10月にかけて、佐藤道子音楽舞踊研究室員が、インドにおける寺院諸行事の調査のため、47年12月より48年1月にかけて、それぞれ2週間の海外渡航を行なった。

国内における関係学会としては、部員は各専門別に、芸能学会・芸能史研究会・中世文学会・東洋音楽学会・日本演劇学会・日本歌謡学会・日本近世文学会などに参加し、それぞれの学会に参与・理事・委員・幹事などとして寄与している。

保存科学部

I 国際関係

昭和47年4月 ローマセンターの理事である岩崎修理技術研究室長は、同センターの総会及び理事会に出席するとともにユネスコ地方センター会議に出席した。

昭和47年4月樋口主任研究官は所長に随行し韓国に出張した。

海印寺、仏国寺、ソウル、慶洲など各地の文化財遺跡の保存状態を調査、又保存に関し技術的意見交換を行なった。

昭和48年2月より次年度4月にかけて、コロポ計画により、韓国より全北大学教授1名、ソウル大学助教授1名が研修員として当部に配された。又外務省よりの依頼によりメキシコ文化博物館修理課長が当部に来り、これも次年度に亘って研修を行なった。これら研修員の指導には殆んど部の全員が当たっている。

II 国内関係

昭和47年8月文化財建造物修理主任技術者講習会がオリンピック記念青少年総合センターにおいて開かれ次の3名が講師を委嘱された。登石部長（保存科学）、樋口主任研究官（素材の化学的補修技術）、新井技官（木材の生物劣化とその防除）。

10月第17回修理技術者（美術工芸品）講習会が河内長野市金剛寺会館にて開かれたが、新井技官は講師を委嘱されて、木材と紙類を中心にして、加害生物（微生物・昆虫）の種類とその加害様相などについて講演した。

昭和47年9月21日当所別館会議室で、文化財保存科学研究協議会を開催、文化庁文化財保護部文化財鑑査官・記念物・美術工芸・建造物三課の担当官、東京国立博物館、東京芸術大学その他多数の関係専門家の出席を得て「金属製品の保存」に関して研究協議を行ない、大きい成果を得た。

昭和48年3月15日には同じく別館会議室で文化財保存科学懇談会（第3回）を開催、文化庁文化財保護部文化財鑑査官、管理課長、記念物課担当官、美術工芸課、建造物課の課長並びに担当官の出席を得て、昭和47年度調査研究概要、昭和48年度調査研究予定、ローマセンターに関する事項、韓国における文化財保存について等の報告を行ない、昭和48年度特別研究、昭和48年度受託研究、昭和48年秋期開催予定の保存科学・修復技術に関するシンポジウム、国内外よりの研修員・研修生の受入れ、研究テーマ選択の方向、保存と修復に関する国際情勢などにつき懇談し、意見交換を行なった。

Ⅵ 研究施設・設備

1 蔵書

美術部

東洋古美術 近代日本美術 西洋美術関係を主として、和漢(26,078)洋書(3,507)を合わせて、29,585冊、ほかに美術関係雑誌、売立目録類及び拓本がある。

芸能部

雅楽・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・民俗芸能・寄席芸その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書3,449冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報・歌舞伎(第1次)・テアトロ(第1次)・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説等の雑誌、丸本・謡本等の台本も収集している。

保存科学部

古来の伝統的生産及び工芸技術書、技術史、または数少ないそれらの科学的究明を試みたもの、修理報告書、調査報告書、及び化学・物理・生物学部門の保存科学に関連する和洋書を合わせて1,537冊を収集している。

昭和46・47年度の新蔵書数は次のとおりである。

区分	美術部		芸能部		保存科学部		計
	和漢書	洋書	和漢書	洋書	和漢書	洋書	
昭和46年度	514冊	14冊	150冊	—	20冊	24冊	722冊
昭和47年度	473冊	25冊	123冊	—	29冊	12冊	662冊

2 資料

美術部

主として写真による美術研究資料であるが、その収集の目的は、内外の資料をあまねく収集・整理・保管して、その完璧な収集箇所として美術の研究に資することであ

VI 研究施設・設備

る。この趣旨に基づいて設立当初から写真撮影による資料の作成をはじめ、印刷物を整理してこれに加える等その収集につとめている。資料の内容は、日本美術・東洋美術・西洋美術および明治・大正美術に大別し、さらにこれを絵画・彫刻・工芸・建築等に分類整理している。その数は特別大型のものから小型のものまで、約13万余。写真資料のほか印譜・図版カード等がある。

芸能部

レコード・録音テープ・写真（8ミリ・16ミリシネを含む）等による芸能資料を多数そなえている。レコードには毎年各製作会社から発売される伝統芸能関係レコードのほか、昭和35年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションレコード5,450枚が含まれている。安原コレクションは、明治・大正・昭和三代にわたって刊行された各種邦楽レコードを網羅したもので、近代における邦楽の実態と変遷を知る上での貴重な資料となるものである。録音テープ及び写真は、雅楽・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので、演奏法の解析を中心とした写真・テープ、あるいは各種文書の記録写真なども含んでいる。種別による所蔵数は次のとおりである。

区 分	レコード	録音テープ	シネフィルム		写 真
			8 m/m	16 m/m	
昭和46年度末	5,815 枚	1,486 本	101 本	3 本	多 数
昭和47年度	—	164	40		”
計	5,815	1,650	141	3	”

3 機器・設備

美術部

光学的研究設備

光学的鑑識法を東洋古美術品の研究に応用することは当研究所において既に戦前から企画されていたが、昭和27年度にはそれまでの予備的研究成果と海外における研究設備を参考とし、科学研究費（機関研究）の交付を受けて本格的な設備を整えるにいたった。その後も技術的な進歩に即応して新規の装置を加え、美術史学の実証的研究

に多大の貢献をしている。現在の主要設備を類別すると次のとおりである。

I X線透過撮影装置

- | | |
|-----------------------|----|
| (1) 可搬式白色X線装置 | 1式 |
| (2) 可搬式ソフテックス装置 (J型) | 1式 |
| (3) 可搬式ソフテックス装置 (新J型) | 1式 |
| (4) 携帯用ソフテックス装置 (E型) | 1台 |

II 紫外線照射装置

- | | |
|------------------------------------|----|
| (1) 固定式照射装置 | 2台 |
| (2) 可搬式照射装置 (フィリップス紫外線ランプ及び専用トランス) | 2台 |
| (3) 携帯用紫外線検査器 | 1台 |

III ナトリウムランプ照射装置

2台

IV 赤外線暗視装置及び間接撮影装置

V 顕微鏡装置

- | | |
|--|----|
| (1) 双眼実体顕微鏡及び写真撮影装置 | 1式 |
| (2) 新型双眼実体顕微鏡及びカラー顕微鏡写真同時撮影装置 (可動支持台及び携帯用スタンド) | 1式 |
| (3) 検査顕微鏡用側視鏡ユニット・モノフォト装置 | 1式 |

VI マイクロ写真関係設備

- | | |
|-------------------------|----|
| (1) マイクロ写真撮影装置 | 1式 |
| (付自動現像機、プリンター、引伸機、乾燥機等) | |
| (2) ポータブル・マイクロ写真撮影装置 | 1式 |
| (3) マイクロ読読機 (ルーモ社製) | 3台 |
| (4) リーダープリンター | 1台 |

芸能部

各種伝統芸能の記録及び分析研究のための設備・機器を所有する。

I 設備

録音室 (遮音壁を備える) ・調整室・視聴室 (舞台を備える) ・資料室・図書室

II 機器

VI 研究施設・設備

ピッチレコーダー	1台
テープレコーダー	10台
ビデオコーダー	1台
16m/m撮影機	1台
16m/m映写機	1台
8m/m撮影機	4台
8m/m映写機	2台
35m/m写真機	5台
35m/mマイクロフィルム解読装置	1台
16m/mシネフィルム分析装置	1台
ステレオ音声調整卓	1台
スピーカー	4台
スタジオ用照明器具	1式

保存科学部

主な研究設備

装置名	説明, 目的, 性能等	数量
走査型電子顕微鏡 (JSM-50A型)		1
恒温恒湿槽	0°~40°C 20~90%	1
サンシャインウェザーメーター	劣化促進試験機	1
真空凍結乾燥装置		1
紙耐揉強度試験機		1
光電分光光度計	自記	1
発光分光分析装置		1
蛍光X線分析装置	非破壊法による元素分析	1
可搬式蛍光X線分析装置	現場可搬用	1
X線回折装置およびデバイ シエラーカメラ, ラウエカメラ	結晶同定	1

装 置 名	説明, 目的, 性能等	数 量
X線発生装置	中間硬度	1
真空蒸着装置	表面薄膜形成	1
金属顕微鏡		1
生物顕微鏡		2
表面アラサ顕微鏡		1
万能顕微鏡		1
C α -60 r線線源	透視用 3 c 及び 0.2 c	2
ガイガー・ミュラー計数装置	放射線測定	1
自記分光放射計	光の分光測定	1
ガスクロマトグラフ	ガス分析	1
(水素イオン化検出器・熱伝導 検出器・熱分解装置付)		
回折格子自記赤外分光光度計		1
”	赤外顕微鏡 他上記機械附属	1
引張試験機	5 Kg	1
自動記録式示差熱天秤		1
炭素・水素・窒素分析計		1
減圧含浸装置		1
減圧殺虫装置		1
超低温槽	-50°C	1
冷却遠心機	-5°C ~ 5°C	1
粒度分布測定装置		1
熱膨張計		1
レオメーター	粘性試験用	1
直読式動的粘弾性測定器		1
ライトガイドカラーメーター	色彩測定	1

文化財の特殊性として、材質の劣化現象究明のための試験機類、非破壊的方法によ

る材質調査のための分析機器類、及び微量試料の分析、調査などに用いる顕微鏡類などである。

4 黒田記念室

この記念室は、本研究所の創立者故帝国美術院長子爵黒田清輝の功績を記念するために設けられたもので、その油絵・素描・画架等を陳列している。

收藏されているものは、油絵 125 点・素描 170 点・スケッチブック等若干である。これらは創立当時主として黒田家から寄贈されたものであるが、その後、榊山愛輔 黒田照子 田中良氏等からの寄贈もふくまれており、随時陳列替を行なっている。毎週木曜日午後 1 時から 4 時まで一般に無料公開している。陳列品の主なものは、「知感情」・「花野」・「湖畔」・「赤髪の少女」・「もるる日影」・「温室花壇」等である。

黒田子爵記念室観覧規程

第 1 条 本研究所の黒田子爵記念室（以下単に「記念室」という。）は、この規程によって一般に公開する。

第 2 条 観覧は無料とする。

第 3 条 観覧者は、備付けの帳簿に現住所、氏名を記載し、掛員の指示を受けるものとする。

第 4 条 陳列品の模写又は写真撮影を希望する者は、予め書面により届出で許可を受けなければならない。

第 5 条 観覧者は、記念室内において左の事項を行ってはならない。

- 一 陳列品に手を触れること。
- 二 インク・墨汁等を使用すること。
- 三 飲食及び喫煙をなすこと。

第 6 条 観覧者がこの規程に違反し、又記念室公開の趣旨に反する行為があると認めるときは、退場を命ずることがある。

第 7 条 観覧の日時は毎週木曜日午後 1 時から同 4 時までとし、観覧を停止する日は左の通りとする。

祝 日

開所記念日 (10月18)

年末年始 (12月25日から翌年1月6日まで)

夏期 (7月21日から8月31日まで)

第8条 本研究所において必要があるときは、前条の日時を随時変更することがある。
但しこの場合は予め掲示する。

5 閱 覧 室

本研究所美術部の図書及び研究資料は主として研究者・学者・美術関係専攻の学生等に公開している。年間の閲覧者数は、延 1,000 名程度である。

VII 職 員

1 現 職 員

昭和48年3月30日現在

所 属	官 職 名	氏 名	入 所 年 月 日	
庶 務 課	所 長	関 野 克	昭 27・4・1	
	長 補	鬼 山 光 義	45・4・1	
	課 長 補	五 十 嵐 春 雄	47・4・1	
	専 門 員	藤 江 金 治	20・8・31	
	庶 務 係	係 長	羽 田 吉 一	28・3・16
		部 事 務 官	松 本 多 賀 子	39・6・16
		事 務 補 佐	齊 藤 靖 子	46・4・1
		" "	根 本 久 美 子	48・3・22
	会 計 係	係 長	大 釜 一 也	37・1・16
		主 任	本 村 伝 一	34・4・1
		文 部 事 務 官	中 里 友 子	39・7・16
		作 業 補 佐 員	高 谷 た ま	39・4・1
事 務 補 佐 員		高 橋 雄 二	43・10・30	
技 能 補 佐 員		早 川 ツル子	45・4・1	
作 業 補 佐 員		大 塚 正 司	44・1・6	
美 術 部		部 長	岡 冨 三 郎	20・5・15
		主 任 研 究 官	上 野 ア キ	17・11・3
		" "	関 野 千 代	18・12・15
	" "	柳 沢 孝 子	21・9・30	
	" "	田 村 悦 子	22・6・16	
	" "	宮 次 男	30・9・1	
第 一 研 究 室	室 長	久 野 健	20・5・31	
	文 部 技 官	猪 川 和 子	22・6・27	
	" "	田 実 栄 子	23・3・31	
	" "	関 口 正 之	42・2・1	
第 二 研 究 室	研 究 員 (非)	秋 山 光 和	42・2・1	
	室 長	中 村 伝 三 郎	22・10・1	
	文 部 技 官	坂 本 満	33・10・1	
資 料 室	" "	陰 里 鉄 郎	41・4・1	
	室 長	川 上 涇	21・2・28	
	文 部 技 官	永 雄 ミ エ	23・9・3	
	" "	江 上 綾	38・5・1	

		文 部 技 官	鶴 田 武 良 昭	47 · 12 · 1
		"	河 野 元 昭	46 · 10 · 1
		專 門 職 員	橋 本 弘 次	21 · 6 · 15
		文 部 技 官	市 川 和 正	30 · 7 · 1
		"	野 久 保 昌 良	36 · 10 · 1
芸 能 部	部 長	長 浦 山 政 雄	27 · 10 · 1	
演 劇 研 究 室	室 長	浦 山 政 雄	39 · 7 · 1	
	文 部 技 官	中 村 茂 子	39 · 7 · 1	
	調 查 研 究 員 (非)	宮 本 道 瑞 夫	41 · 5 · 1	
音 樂 舞 踊 研 究 室	室 長	橫 道 萬 里 雄	28 · 3 · 16	
	文 部 技 官	佐 藤 道 子	30 · 5 · 16	
	調 查 研 究 員 (非)	松 本 雅 雄	44 · 9 · 1	
郷 土 芸 能 研 究 室	室 長	三 隅 治 雄	27 · 10 · 1	
	調 查 研 究 員 (非)	仲 井 幸 二 郎	41 · 5 · 1	
保 存 科 学 部	部 長	登 石 健 三	27 · 10 · 1	
	主 任 研 究 官	樋 口 清 治	37 · 11 · 1	
化 学 研 究 室	室 長	江 本 倉 武 夫	27 · 4 · 1	
	文 部 技 官	門 倉 武 夫	32 · 5 · 1	
物 理 研 究 室	室 長	登 石 健 三	29 · 9 · 1	
	文 部 技 官	見 城 敏 子	29 · 9 · 1	
	"	石 川 陸 郎	32 · 4 · 15	
生 物 研 究 室	室 長	岩 崎 友 吉	45 · 9 · 1	
	文 部 技 官	新 井 英 夫	45 · 9 · 1	
	調 查 研 究 員 (非)	江 本 義 数	33 · 5 · 1	
修 理 技 術 研 究 室	室 長	岩 崎 友 克	27 · 4 · 1	
	文 部 技 官	中 里 寿	39 · 1 · 1	
	專 門 職 員	茂 木 曙	29 · 7 · 1	

2 旧 職 員

(1) 昭和47年度

所 属	官 職 名	氏 名	在 職 期 間	備 考
庶務課	課長補佐	音 川 啓太郎	41・6～47・4・1	岡山大へ出向 退 職
	事務補佐員	織 田 裕 子	45・4～47・8・31	
	〃	高 橋 雄 二	43・10～48・3・30	〃

(2) 昭和25年度～昭和46年度 (25年8月～46年度末)

所 属	官 職 名	氏 名	在 所 期 間
庶務課 (室)	所 長 事 務 代 理	矢 代 幸 雄	27・4～28・11
	所 長	田 中 一 松	27・10～40・3
	履 行 務 補 助 員 仕 雑	(事務) 山 田 秀 昭	25・10～28・4
	〃	長 沢 ア イ	27・5～29・5
	〃	吉 野 茂 七	21・11～29・12
	〃	諸 星 ハ ル	20・5～29・12
	臨 時 筆 生	藤 森 園 子	29・6～31・11
	庶 務 係 長	加 藤 輝 之	27・10～34・11
	〃	安 岡 潤	34・11～36・10
	文 部 事 務 官	長 沢 朝 夫	29・5～36・11
	警 務 係 員	鶴 田 豊 次 郎	29・4～38・3
	庶 務 係 長	鬼 山 光 義	36・10～38・4
	事 務 員	長 沢 道 子	31・12～39・7
	課 長	小 島 忠 二	26・5～40・3
	作 業 員	槽 谷 愛 子	37・2～40・12
	事 務 員	中 村 圭 子	35・11～40・1
	警 務 員	鎌 田 幸 四 郎	29・1～41・2
	課 長 補 佐	守 谷 安 知	38・4～41・6
	文 部 事 務 官	本 間 春 次	40・4～42・3
	課 長	野 島 弥 三 郎	41・4～44・3
事 務 補 佐 員	横 川 千 代 子	43・4～44・3	
課 長	岩 田 守 夫	44・4～45・4	
技 能 補 佐 員	三 次 ヨ シ	45・4～46・3	
警 務 員	友 田 薫	41・2～47・3	
美 術 部	研 究 所 文 部 技 官	島 田 修 二 郎	23・7～26・11
	第 一 研 究 室 文 部 技 官	白 畑 よ し	5・6～27・8
	部 長	松 本 栄 一	24・8～27・10
	第 二 研 究 室 文 部 技 官	河 北 倫 明	18・1～27・10

	第一研究室技術員	鈴木友也	28・1~28・2
	資料室文部技官	持丸一夫	22・6~29・3
	資料室技術員	山田桂二	29・2~30・2
	第一研究室文部技官	大串純夫	14・4~30・7
	第二研究室技術員	池田涼子	22・6~33・6
	文部技官(併任)	新規矩男	22・10~34・3
	部長	福山敏男	23・5~34・4
	資料室文部技官	小沢健志	26・4~36・3
	第一研究室長	熊谷宣夫	19・10~37・3
	部長	田沢坦	34・6~37・4
	第一研究室長	伊東卓治	22・5~38・3
	文部技官(併任)	米沢嘉圃	27・10~40・5
	"	吉川逸治	22・10~40・5
	"	河北倫明	28・4~40・5
	第二研究室長	隈元謙次郎	7・6~41・3
	第一研究室長	秋山光	21・10~42・2
	部長	高田修	27・12~44・3
	資料室文部技官	辻惟雄	37・6~46・5
	第一研究室文部技官	戸田禎佑	37・6~46・6
	部長	中川千咲	9・4~47・3
芸能部	部長(併任)	加藤成之	27・10~32・6
	庁務補助員	新井範子	27・10~34・10
	部長(併任)	下総覚三	33・1~37・7
	演劇研究室事務員	玉木清子	34・9~39・6
	演劇研究室研究員(非)	戸部銀作	27・10~41・3
	音楽舞踊研究室研究員(非)	岸辺成雄	27・10~41・3
	郷土芸能研究室研究員(非)	池田弥三郎	27・10~41・3
	演劇研究室研究員(非)	石田百合子	40・4~41・3
	"	阿部順子	40・8~43・9
	音楽舞踊研究室研究員(非)	山路興造	42・4~44・3
保存科学部	臨時筆生	赤岡恒子	26・4~29・7
	庁務補助員	橋本義雄	28・10~32・7
	修理技術研究室長	毛利登	37・10~38・4
	物理研究室研究員(非)	呉屋充庸	29・4~40・3
	修理技術研究室長	立田三朗	37・10~45・1

注 (1X2)の所属, 官職は, 転退職時を示す。

Ⅷ 関係法規

◎文部省設置法（昭和24年法律第146号
最終改正 昭和47年5月1日26号）（抄）

第3節 附属機関

（附属機関）

第36条 第43条〔審議会〕に規定するもののほか、文化庁に、次の機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国語研究所

国立文化財研究所

日本芸術院

- 2 前項の機関（日本芸術院を除く。）の長は、文化庁長官の申出により、文部大臣が任命する。

（国立文化財研究所）

第41条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行なう機関とする。

- 2 国立文化財研究所の名称及び位置は、次のとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東 京 都
奈良国立文化財研究所	奈 良 市

- 3 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。
4 国立文化財研究所及びその支所の内部組織は、文部省令で定める。

◎文部省設置法施行規則（昭和28年1月13日文部省令第2号
最終改正 昭和47年5月13日第29号）（抄）

第5章 文化庁の附属機関

第4節 国立文化財研究所

第1款 東京国立文化財研究所

(所長)

第117条 東京国立文化財研究所に、所長を置く。

2 所長は、所務を掌理する。

(内部組織)

第118条 東京国立文化財研究所に、庶務課及び次の3部を置く。

一 美術部

二 芸能部

三 保存科学部

(庶務課の事務)

第119条 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

一 職員の人事に関する事務を処理すること。

二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。

三 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。

四 経費及び収入の予算、決算その他会計に関する事務を処理すること。

五 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。

六 庁内の取締りに関すること。

七 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

(美術部の3室及び事務)

第120条 美術部に、第一研究室、第二研究室及び資料室を置く。

2 第一研究室においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なう。

3 第二研究室においては、わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なうとともに黒田記念室に関する事務をつかさどる。

4 資料室においては、美術の研究に関する資料の作成、収集、整理、保管、公表及び閲覧並びに光学的方法による美術の研究を行なう。

(芸能部の3室及び事務)

第121条 芸能部に、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び郷土芸能研究室を置く。

2 演劇研究室においては、演劇及びその保存に関する調査研究を行ない、並びにそ

の結果の公表を行なう。

- 3 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
- 4 郷土芸能研究室においては、郷土芸能及びその保存に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。

(保存科学部の4室及び事務)

第122条 保存科学部に、化学研究室、物理研究室、生物研究室及び修理技術研究室を置く。

- 2 化学研究室においては、文化財及びその保存に関する化学的調査研究(分析化学的調査研究を含む。)を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
- 3 物理研究室においては、文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
- 4 生物研究室においては、文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
- 5 修理技術研究室においては、文化財の修理に関する科学的、技術的調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なう。

◎文部省定員細則(昭和44年5月21日文部省訓令第12号)
改正 昭和47年5月13日第22号 (抄)

文部省定員規則(昭和44年文部省令第12号)第2項の規定に基づき、文部省定員細則を次のように定める。

文部省定員細則

- 1 文部省に係る行政機関職員定員令(昭和44年政令第121号)第1条に規定する定員(以下「定員令第1条定員」という。)及び沖縄の復帰に伴う行政機関の職員の定員に関する法律の適用の特別措置に関する政令(昭和47年政令第191号)第1条に規定する定員(以下「特措法政令定員」という。)別の本省の各内部部局、各国立学校、各所轄機関及び各附属機関別の定員並びに文化庁の各内部部局及び各附属機関別の定員は、次の表のとおりとする。

文化庁

区 分		定員令第1 条 定 員	特措法政令 定 員	計
附属 機関	国立文化財 研 究 所	116人 各国立文化財研 究所を通じての 定員とする。		116人

2 各国立大学、各国立高等専門学校、各国立高等学校、各国立青年の家、各国立博物館、各国立近代美術館及び各国立文化財研究所の定員は、国立学校及び本省の附属機関にあつては文部大臣、文化庁の附属機関にあつては文化庁長官が、それぞれ、前項に規定する当該国立学校又は附属機関別の定員の範囲内において、別に定める。

附 則

(施行期日)

1 この訓令は、昭和47年5月15日から施行する。

◎国立博物館等の機関別の定員について（昭和44年5月26日文化庁長官裁定）(抄)
昭和47年5月1日改正

文部省定員細則（昭和44年文部省訓令第12号）第2項の規定に基づき、「国立博物館等の機関別の定員について」（昭和44年5月26日文化庁長官裁定）の1部を次のように改正する。

「国立博物館等の機関別の定員について」の表を次のように改める。

機 関	定 員
東京国立文化財研究所	46人

附 則

この裁定は、昭和47年4月1日から適用する。

◎教育公務員特例法施行令（昭和24年1月12日 政令第6号
最終改正 昭和47年5月4日第163号）(抄)

(教育公務員以外の者)

第2条 省略

第3条 省略

Ⅷ 関係法規

第3条の2 文部省設置法（昭和24年法律 第146号）第14条〔国立の学校等〕及び第36条第1項〔附属機関〕に掲げる機関（日本芸術院を除く。）並びに国立学校設置法（昭和24年法律第150号）第3章の2〔高エネルギー物理学研究所及び国文学研究資料館〕に規定する機関の長及びその職員のうちもっぱら研究又は教育に従事する者並びに国立養護教諭養成所設置法（昭和40年法律第16号）による国立養護教諭養成所の所長、教授、助教授及び助手については、法第4条〔採用及び昇任の方法〕、第7条〔休職の期間〕、第11条〔服務〕、第12条〔勤務成績の評定〕、第19条〔研修〕、第20条〔研修の機会〕及び第21条〔兼職及び他の事業等の従事〕国立大学の学長及び教員に関する部分の規定を準用する。この場合において、これらの規定中「大学管理機関」とあるのは次の各号の区別に従って読み替え、これらの機関の長及びその職員をそれぞれ学長及び教員に準ずる者としてこれらの規定を準用するものとする。

- 一 法第4条第1項〔採用及び昇任の選考〕については、国立学校設置法第3章の2に規定する機関の長及びその職員にあっては「文部省令で定めるところにより任命権者」、その他の機関の長及びその職員にあっては「任命権者」
- 二 法第4条第2項〔採用及び昇任の選考の基準〕、第7条、第11条及び第12条については、「任命権者」

◎東京国立文化財研究所部室長会議運営規則

（昭和45年1月23日所長裁定）

第1条 東京国立文化財研究所部室長会議（以下「部室長会議」という。）の運営については、この規則の定めるところによる。

第2条 部室長会議は、本研究所の重要事項について協議し、各部課相互の連絡をはかることを目的とする。

第3条 部室長会議は、次の各号にかかげる職員をもって組織する。

- 一 所長
- 二 各部長
- 三 各室長
- 四 課長

第4条 部室長会議は所長が招集し、その議長となる。

2 所長に事故あるときは、会議出席者の中から互選により議長を定める。

3 所長は必要と認める職員を会議に出席させることができる。

第5条 部室長会議は原則として毎月1回開催する。ただし緊急を要する場合は、随時開催することができる。

第6条 部室長会議に関する事務は、庶務課がこれにあたる。

第7条 この規則に定めるものの他、会議の運営に関して必要な事項は、別に定める。

附 則

この規則は、昭和45年1月23日から施行する。

◎東京国立文化財研究所受託研究取扱規程

(昭和46年3月15日所長裁定)
(昭和47年10月2日改正)

(趣旨)

第1条 この規程は、東京国立文化財研究所(以下「研究所」という。)における受託研究(外部からの委託を受けて公務として行なう研究で、これに要する経費を委託者が負担するものをいう。)の取扱いに関し必要な事項を定めるものとする。

2 受託研究は、研究所の文化財に関する調査研究上有意義であり、かつ本来の調査研究に支障がなく、当該年度の予算額の範囲内において行なうものとする。

(受託の条件)

第2条 受託研究の受入れ条件は、次の各号に掲げるとおりとする。

- (1) 受託研究は、委託者が一方的に中止することはできないこと。
- (2) 受託研究の結果、工業所有権等の権利が生じた場合には、当該権利を無償で使用させ、または譲与することはできないこと。
- (3) 受託研究に要する経費により取得した設備等は、返還しないこと。
- (4) やむを得ない事由により受託研究を中止し、またはその期間を延長する場合においても、研究所は、その責を負わず、また、原則として受託研究に要する経費を委託者に返還しないこと。ただし、特に必要があると認めた場合は、不用となった経費の額の範囲内において、その全部または一部を返還することがあること。
- (5) 委託者は、受託研究に要する経費を、当該研究の開始前に納付すること。

Ⅷ 関係法規

- 2 所長は、前項に定めるもののほか、必要と認める条件を別に定めることができる。
- 3 委託者が国の機関、政府関係機関または、地方公共団体である場合は、第1項第3号および第5号の条件は、これを付さないことができる。
- 4 委託者は、必要がある場合は、所長の承認を得て、その委託にかかる研究を協力して行なうことができる。

(決定の方法)

第3条 所長は、当該研究を担当する職員、当該職員の所属する室および部の長の意見を徴したうえ受託研究の受入れを決定する。

(受託の申込等)

第4条 受託研究の申込みをしようとする者は、別紙様式による受託研究申込書を所長に提出しなければならない。

- 2 所長は、受託研究の受入れを決定したときは、その旨委託者および研究所契約担当職員に通知するものとする。
- 3 前項の通知に基づき契約担当職員は、契約を締結した旨を、所長に通知するものとする。

(研究の中止等)

第5条 受託研究を担当する職員は、当該研究を中止し、または、その期間を延長する必要があると認めたとときは、ただちに所属の室および部の長を経て所長に報告し、その指示を受けるものとする。

- 2 所長は、受託研究の遂行上やむを得ない理由があると認めたとときは、これを中止し、または、その期間を延長することを決定し、その旨委託者および契約担当職員に通知するものとする。

(研究結果の報告等)

第6条 受託研究を担当する職員は、当該研究が完了したときは、その結果を所属の室および部の長を経て所長に報告するものとする。

- 2 委託者に対する受託研究の結果の報告は、当該研究を担当した職員が前項の報告後行なうものとする。
- 3 受託研究の成果を公表するときは、所長の承認を得て当該研究を担当した職員が行なうものとする。

附 則

この規程は、昭和46年4月1日から施行する。

この裁定は、昭和47年10月2日から施行する。

〔別紙様式〕

受 託 研 究 申 込 書

昭和 年 月 日

東京国立文化財研究所長 殿

住 所

氏 名 (名称・代表者)

印

東京国立文化財研究所受託研究取扱規程第4条第1項の規程により、下記のとおり
受託研究の申し込みをします。

記

1. 研究題目
2. 研究目的および内容
3. 研究に要する経費
4. 研究用資材、器具等の提供
5. その他

昭和48年10月5日 印刷
昭和48年10月15日 発行

非売品

発行者 東京国立文化財研究所

代表者 関 野 克

東京都台東区上野公園13-27